

神戸 YWCA 夜回り準備会 活動報告書



Vol. 3
2008 年 1 月

報告書VOL. 3を出すにあたって

私たちの活動報告書もこれで3冊目となります。過去2冊の報告書をたくさんの方が手に取ってくださったこと、そしてこうしてこの報告書を手に取ってくださる方がいることを、うれしく思います。

今回の報告書は2006年度～2007年度前半の活動を振り返ったものとなっています。まず1章「夜回り準備会について」では、私たち夜回り準備会の活動内容・なりたち・方針などについて述べています。これは基本的に変わらない部分であり、過去の報告書にも載せている内容ですが、最近の活動展開を受けて、新たに加筆した内容もあります。そして、特に私たちが活動を通じて感じる最近の傾向については、2章「この1年間を振り返って」で詳しく述べています。

3章では、実際に私たちが関わっている人たちから、そのライフストーリーを聞き取りさせていただきました。3章のはじめでも述べていますが、過去2冊の報告書では、「野宿している人が抱える問題」や、「活動メンバーから見た野宿している人」という観点からの話になりましたので、今回はより「その人」に寄り添った、当事者性の高い話を載せようという試みです。

また、2007年2月5日には、大阪の長居公園テント村が行政により強制排除されましたが、その抗議行動に当会のメンバー及び関係者数名が参加しました。後日、その強制排除の現場で各人が感じた思いを語り合った座談会を行ったのですが、4章ではそれをまとめた文章を載せています。私たちの活動フィールドは神戸であり、夜回り準備会の活動とは、いったんは関係のない行動について載せることについては議論もありましたが、その点に関しても座談会のなかで語り合い、共有しています。最後の5章では、活動に参加したメンバーからの感想や意見を載せています。

夜回り準備会も活動を始めてから10年以上経ちますが、私たちに見えているのはまだまだ「氷山の一角」でしかありません。この活動報告書の内容に関してのご意見やご指摘などありましたら、ぜひお聞かせください。みなさんと一緒に考えていくことができれば幸いですし、それでこそこの報告書が本当に価値のあるものになるのだと思います。

(村川奈津美)

目 次

報告書 VOL. 3 を出すにあたって	村川奈津美	1
第1章 神戸YWCA夜回り準備会について	藤室玲治	3
夜回り準備会の目的と原則/夜回り準備会の活動/夜回り準備会の沿革		
第2章 この1年間を振り返って(2006.7-2007.7)	鍋谷美子	8
はじめに/野宿している人は減っている?/私たちの夜回り範囲のできごと		
追い立て/たび重なる襲撃/おわりに		
第3章 活動で出会った人々からの聞き取り		20
藤原さん「猫がおらんかったら、こんなところにはおらん」	山本かえ子・中村祥規	21
小川さん「自分でやっていけるうちは働きたい」	鍋谷美子・頼政良太	24
テツさん「野宿生活をしていたあるアルコール依存症者の仲間の声」	野々村耀・江口怜	28
第4章 座談会・長居公園テント村の強制排除を振り返る	構成：中村祥規	32
江口怜・太田有美・中村祥規・鍋谷美子・藤室玲治・村川奈津美・山本かえ子・渡部菜美		
第5章 参加者の感想		42
今西裕哉・江口怜・岡本建志・岸洋平・堺田愛・砂脇恵・武久真大・中村祥規・中山茂・鍋谷美子・野々村耀		
檜垣智子・藤室玲治・松本光代・村川奈津美・山本かえ子・頼政良太		
付録		56
襲撃についての神戸市教育委員会への申入書/襲撃について報じた新聞記事		
ご協力ありがとうございました/ボランティア募集		58

【コラム目次】

① YWCAとは?	3	⑥ ドヤ	12
② 「ホームレス」という呼び方について	7	⑦ 都賀川流域の変化	13
③ 一斉夜回り	9	⑧ 見えなくなる「排除」	15
④ ホームレス自立支援法	10	⑨ 更生センター・更生援護相談所	19
⑤ 巡回相談員	10	⑩ 神戸市の低家賃施設	19

【表紙】第3章に出てくる小川さん。居宅生活になった今でも、荒ゴミ集めの仕事をしている。小川さんの自転車は、重い荒ゴミを積んだり、夜走るためのいろんな工夫がしてある。(なべたに画)

第1章 神戸YWCA夜回り準備会について

藤室 玲治

- 》1. 夜回り準備会の目的と原則
- 》2. 夜回り準備会の活動
- 》3. 夜回り準備会の沿革

●写真 夜回りでテントを訪問し、そこに
住んでいる人の話を聞いている（2007
年3月10日）



1. 夜回り準備会の目的と原則

会の目的

「神戸YWCA夜回り準備会」は倒産・リストラ・その他、様々な理由で住むところを失い、公園や路上で生活せざるをえない人や、入院した後に帰る家がない人々が抱える様々な困難について話を聞き、私たちができることについて支援している団体です。こうした活動の目的を次のように表現しています。

野宿したくない人が

野宿しなくてすむように

野宿せざるをえない人の

人権がそこなわれないように

コラム① YWCAとは？

YWCAは、Young Women's Christian Associationの略で、日本語では「キリスト教女子青年会」という。100以上の国々にいる約2500万人の女性たちが力を合わせて、女性があらゆる機会において社会参加、自立することにより、平和な世界を実現するために働く、国際的な会員運動体である。イギリスで最初に創られ、日本では1905年に創立された。現在、国内27の地域YWCAでは「憲法改悪を阻止し、第9条を世界平和の礎にする」「『核』廃絶と、自然エネルギー活用を推進する」「子どもの権利を守る」「女性への暴力の問題に取り組む」を運動の課題として、さまざまなプログラムを行っている。

今、日本では「正規雇用」「非正規雇用」の2分化が進み、景気の回復が言われる一方で、貧富の差が拡大しています。多くの人が失業の恐怖を感じながら働いています。そして仕事を失い、家賃を払えなくなると、住むところを失ってしまいます。

以前は、建築や港湾労働などの日雇いの仕事で生計を立てていた男性が、ケガや病気によって働けなくなったり、あるいは高齢になり仕事からあぶれて野宿に追い込まれることが多かったのですが、今はより多様な職種の労働者が、失業をはじめとする様々な理由によって野宿に追い込まれています。

こうして野宿せざるを得なくなった人は、医療からの排除や、追い立て・襲撃などの命に関わる困難を抱えることになります。住所が無いために就職活動もままなりません。また生活保護をはじめとした社会保障を受けることも、自力では困難です。

私たちは野宿している人々の人権がそこなわれないように、さらには、そもそも人々が住むところを失わずにすむような社会の実現を目指し、活動しています。

活動上の原則

野宿している人の選択や尊厳を何よりも大切にしたいと思っています。人間同士の信頼関係で成り立っている活動ですので、野宿している人のプライバシーを侵したり、生活を損ねるような行為などがあれば、活動を遠慮してもらう場合もあります。

会の参加者について

この団体は神戸YWCAの会員活動グループであり、神戸YWCAの本館や分室を拠点に活動しています。夜回り準備会の目的に賛同して、活動原則を守るならば、年代・性別・宗教などは一切問わず、どなたでも参加できます。活動に参加してみたいという方は是非、奥付の連絡先までご一報下さい。

なお、最初の数回の参加では不要ですが、継続的に活動するには兵庫県ボランティア共済への加入（年間500円、掛け捨て）をお願いしています。

2. 夜回り準備会の活動

活動内容

夜回り準備会では神戸市の灘区・東灘区において「夜回り活動」と「病院訪問」を定期的に行っています。また、夜回りや病院訪問で受けた相談についてより踏み込んだ支援が必要なときには、不定期に「昼回り活動」を行っています。これには生活保護の申請同行や、医療機関での診察への同行などの活動が含まれています。毎月第3土曜日にはメンバーでミーティングを開催し、活動を振り返り、各種の行事を準備し、その他に会として必要な意思決定を行っています。

以下で、ごく簡単に「夜回り」「病院訪問」「昼回り」の概要を紹介します。

夜回り

夜回り活動は毎月2回、第2土曜日と第4土曜日の夜に実施しています。野宿している人の安否を確認し、神戸市の施設や民間の支援活動などについての情報を提供します。また、医療や生活保護を受けたいという相談や、あるいは追い立てについての相談を受けた場合は、本人の希望に沿って、こちらのできることについて協力しています。

夜回りの日には18時に神戸YWCA分室に集合して準備を行ない、19時に3～4つのコースに分かれて出発、野宿している人のところを訪問します。そ

の後21時には分室に戻り、各コースの様子を報告しあい、今後、昼回りなどでフォローすべき案件などを確認した後、22時過ぎに解散します。

初めて参加される人には、17時に来てもらい、野宿している人の問題や会の活動内容、活動上の注意などについてのガイダンスを受けてもらっています。

夜回りの際には各グループが以下に掲げるものを持参して、野宿している人を訪問しています。

お茶セット（コーヒー、紅茶、緑茶、味噌汁、スープなど）／毛布／ビラ類（「神戸の冬を支える会」「カトリック社会活動神戸センター」からのビラも含む）／薬（風邪薬、胃薬、正露丸などの下痢止め）／乾パン／蚊取り線香（主に夏）／カイロ（主に冬）／石鹸／下着類・ジャンパー（要望があったときに昼回りで持参している）／おにぎり（2006年1月より、第4週のみ）

夜回りでは物を「ほどこす」ことが目的ではなく、医療や生活保護、追い立てなどについて話をきき、可能な支援につなぐためのコミュニケーションを取ることを主な目的としています。ただ、話のきっかけとして、お茶などをすすめています。また厳しい野宿生活の中で必要になるであろうささやかな物品については寄付などで集めて配っています。

2006年1月からおにぎりを結んでくれるボランティアが第4週に来てくれるようになり、一人当たり2つのおにぎりを配ることができるようになりました。おにぎりに使うお米は、様々な方々からの寄付によっています。

2007年6月からは、新たに「夜中回り」と称して深夜の駅で寝ている人を訪問する活動を始めました。現在では毎月1回、第4土曜日の夜回り活動後に実施しています。各路線で最終電車の終わる深夜00:30ころから開始し、03:00頃に終了します。

病院訪問

病院訪問は毎週1回（午後）活動しています。夜回りで知り合った野宿していた人が入院している病院や、その他にも退院した後に帰る家がなく野宿

生活になりかねない人のところを訪問しています。

「病院訪問」の目的は主に2つです。ひとつは、入院生活における困難を軽減し、治療が中断されないようにすること、2つめは（本人が希望するなら）退院後に野宿生活に戻らないで済むように手伝えることです。

昼回り

「昼回り」では「夜回り」「病院訪問」で知らされた問題（医療、住居確保から生活保護受給、追い立てと襲撃など）のフォローが主になります。また夜回りでは気がつかない人を探したり、夜回りではゆっくり聞けなかったことを聞かせてもらったりすることも課題です。また、いろいろな相談の電話もあり、できることには応えたいと考えています。

3. 夜回り準備会の沿革

阪神・淡路大震災の救援活動から

ここでは神戸YWCA夜回り準備会の成り立ちから現在までのあゆみについて簡単に紹介します。

そもそも、神戸YWCAでの野宿している人への支援活動は、1995年1月17日に発災した阪神・淡路大震災の救援活動をルーツに持ちます。

阪神・淡路を襲った最大震度7の都市直下型地震では死者6,434名という戦後未曾有の被害が発生しました。全壊186,175世帯、半壊274,181世帯となり、多くの人が一瞬にして住む家を失いました。

当時、神戸市中央区上筒井にあった神戸YWCA本館も避難所となりました。

テント村での活動

学校などの公的避難所は人であふれかえっていました。避難所に入れなかった人々は、倒壊した自宅、公園や空き地のテント、あるいは自動車の中で避難生活を送っていました。震災後1週間ほどから、そうした公的避難所の外にいる人々へ、神戸YWCA救援センターのボランティアが物資や情報を届けて

回りました。

「ホームレス」との出会い

一ヶ月ほど経った頃、公園のテント村を訪問していたときに、ある住民から「向こうのテントの住人には物資を配らなくてよい」と言われたことがありました。その「向こうのテント」に暮らしている人は、震災前から住むところを失っていた人、いわゆる「ホームレス」でした。多くの被災者が野宿していた当時の神戸で、こうした差別があったのです。

この件について、救援センター内で議論を行いました。そこで「震災によって家を失った人であろうが、そうでない理由で家を失った人であろうが区別する理由がない」ということで、その後もずっと同じように対応することとなりました。

「神戸の冬を支える会」の結成

1995年初秋頃より、神戸市内で同じように震災救援活動をしていて、「罹災証明を持たずに」つまり震災以外の理由で家を失った野宿をしている人も支援しているいくつかの団体が集まり「神戸の冬を支える会」が結成され、神戸YWCA救援センターもその構成団体の一つとなりました。

この「支える会」は、年末に野宿をしている仲間たちで支えあって冬を乗り越えるために、市役所南の東遊園地にテントで「冬の家」を開設しました。ここに救援センターからも毎日ボランティアを派遣しました。冬の家を建てて神戸市と交渉を重ねた結果、更生援護相談所の施設改善を勝ち取り、冬の家を撤収することとなりました。

夜回り活動の開始と展開

しかし、まだまだ寒い日が続いているため、支える会の呼びかけに応じて、1996年2月中の毎週土曜日、カトリック中山手救援本部や支える会の協力を得ながら、中央区（東部）と灘区で夜回りを始めました。これが私たちの「夜回り」活動のはじめになります。

1997年には、野宿している人の状況把握のため、

厳冬期以外にも月1度くらいのペースで生田川から石屋川あたりの夜回りを続けていました。1997年9月ごろには、青木フェリー乗り場の待合室で暮らしている人がいるという情報を得て、訪問の範囲を東灘区まで広げました。

「夜回り準備会」の発足

1998年3月末には救援センターの活動は終了しました。4月より新たに神戸YWCA震災復興委員会が発足しました。この震災復興委員会では救援センターからいくつかの活動を引き継ぎましたが、その内のひとつが「夜回り活動」でした。

この活動を行うグループの名称については、話し合い考えたあげく「夜回り準備会（仮称）」となりました（現在では「（仮称）」はとっています）。どうもピッタリとくるネーミングが見つからなかったという事情によるものです。

このころから、毎月第2・第4土曜日の夜回りと第3土曜日のミーティングが恒例化しました。

1999年からは、「病院訪問」や福祉事務所への同行などの「昼回り」の活動も始まり、現在にまで続く活動のスタイルが定まりました。

神戸大学学生震災救援隊との関係

2001年に神戸大学の学生と地域の人で開催するお祭り・灘チャレンジが灘区の都賀川公園で開催されると知り、そこで野宿の人を追いつ立てるようなことをしないで欲しいと、学生たちに申し入れに行きました。このことがきっかけとなり、私たちも野宿の問題をアピールするためにこの年の灘チャレンジから参加するようになり、現在まで毎年出店するようになりました。

またこのお祭りで神戸大学の学生震災救援隊との関係ができ、2003年2月には神戸大学が主催し学生震災救援隊が企画している神戸大学ボランティア講座の実習生を初めて受け入れ、現在にいたります。

2004年度、救援隊の学生たちが、灘チャレンジで「ホームレス」をテーマにした風刺劇の上演を企画し、その実施に「夜回り準備会」も協力しました。

またこの年に、灘チャレンジ当日の会場で、敷金なしで物件を紹介しても良いという大家さんからの申し出も受けることができました。そのおかげで、居宅を希望する人への対応がスムーズに進むようになりました。

現在は、救援隊のメンバーの何人かが、夜回り準備会の活動に定期的に参加しています。

地域活動委員会の発足

神戸YWCAでは2002年4月から、いままでの震災復興委員会を解散して新たに地域活動委員会を立ち上げました。「夜回り準備会」もこの地域活動委員会に所属するグループということになりました。

2004年度「ホームレスをめぐる4つの話」

2004年度には「ホームレスをめぐる4つの話」と題した連続講座を開催しました。「神戸の冬を支える会」の青木茂幸さん、静岡大学の笹沼弘志さん、大阪の「長居公園仲間の会」の中桐康介さん、ルポライターの北村年子さんの4名にお話していただきました。その内容は講演録にしてまとめてあります。

2005年度から2006年度の活動

2005年度には神戸大学学生震災救援隊が応援している「学童保育所どんぐりクラブ」で、学童保育所卒業生の中学・高校生相手に「野宿の問題」について話しました。また2005年度から、活動内容について取りまとめた「活動報告書」も作成するようになりました。

また2006年度からは神戸市の「シルバーカレッジ」にメンバーが講師として招かれて、野宿の問題について話をしています。

情報を発信する機会も増え、活動への参加者も増えています。一方で訪問している野宿している人の数は減少傾向にあります。

しかしながら、襲撃や追い立てなど、私たちが取り組むべき課題は減っていません。今の私たちの活動と課題について、次の第2章をご参照下さい。

（ふじむろ れいじ）

コラム② 「ホームレス」という呼び方について

夜回り準備会は、いわゆる「ホームレス」の問題に取り組んでいる団体といえる。しかし私たちはなるべくこの言葉を使わないようにしている。

かつて、公園や路上で生活している人は「浮浪者」と呼ばれていた。例えば1983年に横浜で、十数人の中学生が面白がって、山下公園他で寝ている3人の日雇労働者を殺し、20人ほどに怪我をさせた事件があり、このことを当時の新聞は「横浜浮浪者連続殺傷事件」という大見出しで報じていた。これに対して日雇労働者の組合は、自分達は仕事が途切れて収入がなくなると、宿泊料を払えなくなって野宿するしかない、その時に「浮浪者」として扱われるのは差別的だと批判した。「浮浪者」ではなく、失業した労働者なのだ、と主張したのである。

日雇労働者の平均年齢が高くなり、働けない（病気・障害・高齢）者が増えるとともに、全国的に支援運動が増えてきた。その中で、自分達の運動をどう呼ぶか、言いかえると野宿している人をなんと呼ぶか戸惑いがあった。幾つかの例をあげると、「野宿労働者の人権を守る……の会」「野宿者人権資料センター」「……野宿生活者の……を守る会」「……野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議」「日雇労働者の人権と労働を考える会」等々、「浮浪者」ではない呼び名を模索して来たように思われる。「野宿者」「野宿労働者」「野宿生活者」等の表現はこうした苦心の表れである。

マスコミも「浮浪者」の代わりに様々な呼び方を模索してきたが、近年では「ホームレス」というカタカナ語が使用されることが多い。この言葉は「浮浪者」よりはスマートに聞こえるので使われるようになったのだろう。しかし、意識の中では「浮浪者」の言い換えに過ぎないのではないだろうか。「ホームレス」には「どこことなく怪しい、普通でない」「不審者」「ルンペン」という語感がつきまとう。

カタカナの「ホームレス」は、もちろん英語の "the homeless" から来ている。しかし英語の用法であれば、災害や戦災の被災者で家を失い、避難所や知人宅、難民キャンプに身を寄せている人のことも "homeless people" と呼ぶ。しかし日本のマスコミが災害で家を失った被災者のことを

「ホームレス」と報道することはない。また阪神・淡路大震災のときには、被災して家を失った人自身が、公園で隣にテントを張っている人のことを「あっちに住んでいるのは『ホームレス』だから支援せんでええ」と差別的に表現したこともある。

こうした例から分かるようにカタカナ語の「ホームレス」には単に今は住む家がない人を表現するという以上の、かつての「浮浪者」という言葉に通じる差別的な語感がただよっている。だから私たちは「ホームレス」という言葉を避けている。

とはいえ「野宿者」や「野宿している人」という表現も難しい。「野宿者」と言うと、その人の人格全体が「野宿」と言う色に染まって見えてしまう。確かに、野宿している人なのであるが、その人が同時に日雇労働や都市雑業に従事する労働者であること、様々な工夫とやりくりをして日々を送る生活者であること、権利の主体であり社会を構成する市民であるということが見えにくくなってしまっているのではないかと思う。とはいえ、現状では他に良い表現も見当たらないので「野宿している人」という言葉を使っている。

一面、こうしたこだわりは言葉の問題に過ぎないとも言える。呼び方を云々することで、支援のあり方や、当事者の困難がすぐにどうにかなるというものではない。しかし同時に、言葉の問題とは油断のならない力を持つものである。

2002年8月7日「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」が施行された。ここに日本の法令上はじめて「ホームレス」という言葉が登場し、次のように定義された。「この法律において『ホームレス』とは、都市公園、河川、道路、駅舎その他の施設を**故なく**起居の場所とし、日常生活を営んでいる者をいう」。ここで「故なく」というのは列挙されている「施設」を管理する側にとって「故なく」ということだ。寝ている側の事情として「故なく」して「ホームレス」である人に私たちは出会ったことがない。またこの定義では、列挙されている施設にいる人以外は対象にならない。この定義の内に、この法律の社会政策としての「**哲学の貧困**」が現れている。

この定義に納得できない私たちとしては、やはり安易に「ホームレス」という言葉を使うことはできない。

第2章 この1年間を振り返って（2006.7-2007.7）



鍋谷 美子

》はじめに 》1. 野宿している人は減っている？
》2. 私たちの夜回り範囲でのできごと
》3. 追い立て 》4. たび重なる襲撃 》おわりに

●写真 アクリル板で下の空間を閉鎖する
三宮の歩道橋。排除を不可視化するデ
ザイン（2007年5月31日）

はじめに

タイトルは「この1年間を振り返って」となっていますが、毎年7月に行われる一斉夜回り（コラム③参照）を目安に、だいたい2006年7月から2007年7月までのできごとをまとめています。夜回り準備会について、それ以前のことは、2004年度と2005年度の報告書にある程度まとめられているのでご参照下さい。

2007年4月、国のホームレス実態調査の結果が発表され、野宿者の数は減ったと言われています。しかし、実際のところそれは野宿している人のおかれている状況の好転を意味するのだろうか？と疑問を持つことが多くあります。

そこで、私たちが現場で見聞きすることからを分析し、報告したいと思います。また、この間に起こった襲撃や追い立て、それに関する取り組みを通して感じたことなどにも触れ、大きくこの1年間を振り返りたいと思います。

1. 野宿している人は減っている？

政府の調査と現場の実感

2007年4月に発表された国の調査結果では、全国のホームレス数は1万8564人。5年前の調査の2万5296人に比べ、26.6%の減少だということです（厚

生労働省『ホームレスの実態に関する全国調査報告書』）。その原因を政府は、景気の回復や、国の自立支援施策が効果を上げ人数が減った、というふうにコメントしました。果たしてそれは事実でしょうか。現場の実感としては、野宿している人に出会う数自体は確かに減っています。しかし、私たちの一斉夜回りでも、国の調査でも把握できていない、安定した住居のない人はむしろ増えているのではないかという感触があります。景気の回復という時に、政府は失業率の改善をあげますが、問題はその中身です。増えている仕事の中身は、ほとんどが不安定な非正規雇用です。景気の回復の裏側で、働いても食っていけない仕事が増えているのです。

以下、まず私たちが活動している神戸市の状況に簡単に触れておきたいと思います。神戸市では、もととある更生センターや更生援護相談所の存在を理由に、ホームレス自立支援法（2002年成立、正式名称「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」）以降も、とりたてて自立支援策と呼べる施策は行われていません。2004年度から巡回相談員が2人置かれただけです。逆に公園や河川敷からの追い立ては増えていて、大きなテント村はもうほとんどありません。生活保護については、神戸市ではドヤで保護が受けられることや、震災時の支援団体の集中的な行政への働きかけもあり、一定の人が制度を利用しています。しかし、政府の言うような、「自立」・就業によって野宿を脱する人が増えているということではありません。

こういう状況の中で私たちの夜回りの現場では、どのようなことが進行しているのでしょうか。

2. 私たちの夜回り範囲でのできごと

灘・東灘の夜回り・病院訪問から

私たちの夜回りしている灘・東灘の範囲では、通常活動として第2・第4土曜日の夜に、野宿している人の所を訪ねています。2005年度は毎回、約30人ほどの住まいを訪問していました。今回、2006年度の状況を振り返るにあたって、2006年7月と2007年7月に行われた一斉夜回りの結果から、状況を分析してみたいと思います。また、その間の個々の具体的なケースも見ながら、野宿している人が減ったといわれる理由を考えていきたいと思います。

2006年7月の一斉夜回りで、灘区・東灘区内で野宿している人の数は30人。しかし、2007年7月には21人となっています。これだけ単純に見ると、9人が減ったことになります。また、一斉夜回りデータとは別に私たちがこの1年間で関わった中で、なんらかの形で野宿状態ではなくなった人の数は、15人となっています。さて、一斉夜回りの数だけ見ると、この一年間に9人しか減っていないわけですから、 $15人 - 9人 = 6人$ が、新たに灘・東灘で野宿状態になっているということになります。

私たちの関わった15人の内訳を見てみると、【表】のように居宅生活8人（うち生活保護6人／年金2人）／施設保護（更生センター入所）2人／行方不明（別の場所で野宿・居候など）4人／死亡1人となっています。灘・東灘で見られなくなったものの、他の場所で不安定な生活を続けている人もいます。ただ数の推移を見るだけでなく、そこに居た人がどこに行ったのかを見ていくことが重要だと思います。のちに触れますが、この間の夜回りで出会い、すぐにいなくなって一斉夜回り時点での数には含まれていない人もいます。

【表】この1年間に野宿状態ではなくなった人の内訳
(2006. 7 - 2007. 7)

理由	人数	備考
居宅生活	8人	うち、生活保護6人／年金暮らし2人
施設保護	2人	更生センターへ入所
行方不明	4人	他の場所で野宿／仕事場に居候など
死亡	1人	テントの中で死亡
計	15人	

※表には、夜回りで出会ったものの、すぐにいなくなった人などは含んでいない。

コラム③ 一斉夜回り

神戸市内でどれだけの人が野宿しているのか。神戸市は毎年調査していて、野宿者対策の根拠にしているが、その結果は野宿者支援をしている側の実感を下回る。そこで独自の調査が必要だと考え、1999年から毎年1度、市内の諸支援団体（神戸YWCAは灘区・東灘区を担当）が、7月はじめに一定の日時を決めて一斉に野宿している人の数を調査している（取りまとめ「神戸の冬を支える会」）。

今年までの調査集計結果は以下の通り。

年	男性	女性	不明	合計	前年比
2007年	155	2	0	157	73.71%
2006年	208	4	1	213	66.98%
2005年	305	9	4	318	81.54%
2004年	370	18	2	390	88.44%
2003年	419	14	8	441	90.37%
2002年	470	12	6	488	111.42%
2001年	416	8	14	438	86.56%
2000年	464	13	29	506	101.40%
1999年	472	14	13	499	—

ここ数年、神戸市内に関しては、減少の傾向がみられる。2007年も減少となり、灘区・東灘区でも2006年の30人から2007年は21人となった。

同時に2006年7月から2007年7月にかけての1年間で「神戸の冬を支える会」の生活相談により122名が野宿から脱却している（生活保護120名・年金受給2名）。このことを合わせて考えると、神戸で野宿の状態に追い込まれる人の数が減っているとは言えない。

野宿をやめて（居宅・施設）

さらに詳しく見てみます。まず「居宅生活」ですが、8人中4人は、近隣の住人から荷物について苦情がある、住んでいる所の上の橋をペンキ塗りしたいので、などの理由で住んでいた場所からの立ち退きを市に求められました。身体の限界などの事情もあり、私たちがお世話になっている大家さんに、敷金なしで入居させてもらったりして、なんとか居宅生活につながりました。これは文字にすると簡単なのですが、いつも大変な思いをします。現在の神戸市では、福祉事務所は、まずアパートなりを借りて住所をつくってからでないと生活保護の申請すら受け付けてくれない、という不当な扱いをしています。このため、私たちはまず家のない（本当はテントなどがあるのですが）野宿している人になんとか部屋を借りて住所をつくり、住んでもらってから生活保護の申請をする、という手続きをとっています。ときには神戸市の巡回相談員から、家がなくて困っている人がいるんだけど、と相談を受けることもあります。本当は市がすべきことを私たちが肩代わり

コラム④ ホームレス自立支援法

正式名称は「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」。10年の時限立法で、2002年7月に成立。安定した雇用や住居の確保、医療や福祉の提供、野宿している人の人権擁護など様々な項目にわたって規定がある。

しかし同時に、公共施設の適正利用を定めた11条の存在により、法の成立以後追い立てが厳しくなる結果になったとも言われており、その運用に関しては、賛否両論がある。2007年はちょうど折り返し年になっており、自立支援施策がうまく機能したかなどを調べるため、全国で実態調査が行われた。

コラム⑤ 巡回相談員

自立支援法に基づいて神戸市が2004年度から設置した嘱託職員。兵庫荘の中に事務所を置き、2名で市内の野宿している人のところを回って相談活動をする。しかし、実際の権限はあまりなく、利用できる社会資源もとくに目立ったものはない。

しているような状況があります。

残り4人のうち2人は、体調を崩し入院。そこから生活保護を継続して居宅と、年金の手続きをして居宅、という方法をとりました。あとの2人は神戸市の施設に移り、そこから保護を受けて居宅生活に移ったということでした。

次に「施設保護（更生センター）」の2人ですが、1人は体調を崩し、自分で更生センターへ。もう1人は、火の不始末で寝床で火事にあい、救急搬送されて入院ののち、更生センター、という道筋です。どの人も、居られなくなる、体調を崩し、仕事ができなくなる、などのきっかけがあり、そこから居宅生活などに移行しています。それは逆にいうと、そういったきっかけがない限り、野宿生活でもなんとか暮らしていこうという人が多い、と言えます。

行方不明

次に、「行方不明（別の場所で野宿・居候など）」の人たちについてみていきたいと思います。4人のうち3人は、住んでいる場所への追い立てがあり、私たちがその情報を把握したときにはすでにいなくなっていたか、居宅保護への段取りをつけたものの、本人の納得がいかず、そのまま行方不明になってしまう、という形でした。残りの一人は、怪我で入院していたのですが、飲酒がばれて強制退院になったのち、公園などを転々として、ある場所に居候することになったと聞きました。

行方不明とはいえ、どの人も、だいたいどこそで寝ているらしいよ、という情報はあり、私たちの知り得ない、野宿している人の中でのネットワークのすごさを感じます。この人たちは、上記の居宅生活の道筋に乗ることはなかったものの、住んでいる場所を変えざるをえなかった理由は、生活保護などに移る場合と変わらないものでした。

亡くなった人

2007年1月21日、テントでひとり亡くなっていたのがIさんでした。2004年度の報告書にも襲撃を受けてお金を取られた、という記述で出てきた方です。

Iさんとは、Iさんがテントに住むようになるまでにすでに何度も会うことができました。少なくともテントで暮らし始める1年半前、わたしたちが訪問しているテントの住人の近所の友人として、遊びに来ていたのです。そのとき、塗装の仕事をしながらアパートを借りて一人で暮らしていたIさんは、もう仕事がいぶ減っていて、家賃が払えなくなったらテントに住まわせてもらいたい、という話もよく出ていました。2004年の夏に夜回りに行ったときには、すでにアパートを出て、近くのテントに住んでいました。それからは、アルミ缶集めで生活し、ときに炊き出しにも行っていたようでした。亡くなるまでは、周囲もとても心配するほどお酒を飲んでおり（最後の方はもう飲めなくなっていた）、飲んだ状態で転んだりして怪我をすることも何度かあり、私たちも、アルコール症の治療をした方がいいのでは、と勧めていたところでした。

亡くなったときは、テントの中でストーブを焚き、椅子に腰掛けた姿勢のままで、翌朝隣のテントの人が、挨拶しても返事がないのをいぶかしんで、発見したそうです。死因は、肺の血管が詰まっていたということでしたが、はっきりとしたことは分かりませんでした。Iさんには、近くに家族がいることが分かり、親族以外には詳しいことは話せない、というのが警察の弁でした。生きているうち、ほとんど連絡をとっていなかった家族が、亡くなってからいることが分かり、生前関わっていた私たちや他の野宿している人などに、まったく情報が遮断されたり、お別れも言いに行けないということがあります。なんともやるせない思いになります。Iさんについては、もっと早くにアルコール症の治療や、そもそも仕事を失い、アパートを出ざるをえなくなる前に、生活保護などの福祉手続きに繋がれなかったのだらうかと、後悔の思いと、そういう手段から野宿している人を排除している現在の行政の仕組みに憤りを感じます。

もう一人、【表】の数には入っていませんが、野宿からすでに居宅に移っていた人が、2006年7月アパートで亡くなるということがありました。亡くなっ

てからしばらく発見されず、部屋から蛆が出てきているのをおかしいと思った近隣の人により分かりました。家主とのトラブルで家を出て野宿になってから、年金がもらえなくて困っている、というところに出会い、現況届けを受け取る住所を貸して、年金の手続きを手伝いました。その後、追い立てと同時に相談され、大家さんを紹介してアパートで暮らすことになりました。せっかく屋根の下で暮らせても、野宿のときにはあったつながりを断たれ、最後は一人で亡くなったことを思うと、アパートに入ってからフォローについて、なかなかできないでいることを歯がゆく思います。

先のIさんはテントの中で亡くなっていたわけですが、野宿している人の中でも、テントを持ち、屋根と自分のスペースを確保している人たちは、路上で段ボール1枚で寝ている人たちよりまだ生きていきやすいといえます。寒さや雨をしのげる屋根と壁、固定して寝る場所が決まっている安心感、アルミ缶や荒ゴミ集めをしてものを置いておけるスペース、一人になれる空間、食料や調理器具の置いておける、使える空間などの確保は生きていくうえで大きなメリットとなります。そういうものが確保しづらい路上で寝ている人たちは、はるかに厳しい状況に置かれているといえます。しかしそのテントをなくそうとする動きが、徐々に各地で進行しています。Iさんのように、テントがあつてすら、生きていけなかった。テントを持たない人たちは、どうしているのでしょうか。

見えにくい人々

そういったテントに住まない、私たちの出会えていない人が多くいることも感じます。上記の数の中には現れてこない人たちです。こういった人たちが、現在の野宿している人たちの状況をよく表しているのではないかと強く思います。

私たちが会っている人は、多くがテントや小屋を建てて暮らしています。小屋を持っていなくても、ある場所に定住して寝ているので、定期的な訪問で会うことができます。そういう人たちに会っている

ときに、「あんたらの知らない人がたくさんいるけど、場所が決まってないから会えないだろう」とか、「最近新しく野宿になった人をずいぶん見かける」という話も聞くことがあります。実際、夜回りで何回か会って、そしてその後会えなくなる人も結構います。2006年度だけでも、名前を聞いた人で7人ほど、分からない人も含めると10人余りの人に出会っています。この人数は、一斉夜回りの中には入っていないし、11ページの【表】の中にもありません。そういう幾人かの人の話の中から「荒ゴミ集めをしながら転々とする、寝場所は都度変わるので決まっていな」とか、アルミ缶を集めながら和歌山から姫路まで、という広範囲を移動して生活しているということも聞きました。また、出会った人から「新しく野宿になる人は、野宿者然としてないし、場所も固定してないからなかなか気づかれない」という話をされたこともあります。

私たちは、自分たちが会えなくなっているから「減っている」と感じてしまっていますが、野宿している人たちの中では、逆に増えているという実感があるようです。この「見えにくい人々」の数は行政の統計には表れてきません。また同時に、神戸市の施設や病院にいる人たちの中にも帰る家のない人たちがいるのですが、カウントされず、住居不安定な層としてとらえられていません。

コラム⑥ ドヤ

ドヤとは簡易宿泊所のことで、宿（ヤド）を「人が住むところではない」と自嘲的にさかさまに読んだのが始まりという説もある。以前は日雇労働者の利用が多かった。素泊まり（食事を提供しない）の簡易な旅館のこと。たたみ1畳のところもあるが、3畳のところもある。共同便所、共同の流しがひとつの階にひとつあるくらいのところが多い。最近建ったところは少し住みやすい。

神戸ではドヤを住所にして生活保護の申請をすることができるが、日本最大のドヤ街・釜ヶ崎のある大阪では住所とは認められずできない。同じドヤ街でも横浜・寿町ではドヤを住所として生活保護の申請ができるなど、地域によって扱いに差がある。

夜中回り

そこで、夜回りだけでは出会えない人たちに会いに行こうと、2007年6月から夜中回りの試みも始めています。これはもともと夜回り先の人が追い立てられたのちに終電後の駅舎で寝ているという情報をもとに、探しに行ったのがきっかけです。ところが、他にも寝ている人に何人も出会い、月に一度ほど継続していくことになった取り組みです。最終電車が出てから、始発が出発するまでの数時間しか寝られない人たちを訪問しています。まだ始めたばかりですが、私たちの知らなかった世界が眼前に広がっているような、事態の深刻さにすくんでしまいそうです。

生活保護の締め付け

また、現在週1回の病院訪問も行っていますが、そこで出会う人々の間でも、しんどい話を聞くことがあります。退院後、帰るところがないと言うと、福祉事務所のCW（ケースワーカー）に「ドヤに住むように」と言われたが、みつからなくて困っているという人に病院で出会いました。そこで一緒に福祉事務所に行くと、CWが「敷金は出せない」と言うので、出せるはずだと言うと、係長を呼んできて、その係長は「出すこともできます」と言う。それを聞いてCWは「え、出せるんですか」と驚いていたということもありました。

こういう教育を受けたCWに「退院後に敷金は出せない」と言われ、アパートでの生活をあきらめてしまう場合も多いでしょう。病院訪問では、そうならないように、今後を不安に思っている人に声かけし、ときには一緒に福祉事務所に行くようにしています。しかし全体に、敷金を出し渋るようになっていのではないかという感触もあり、生活保護の締め付けがきつくなってきているのを感じます。

同様に、すでに保護を受けて居宅生活をしている人への就労指導も厳しくなっています。脅迫のような就労指導に耐えかねて、部屋を出てしまい、また野宿に戻ってしまうという人もいます。高齢や健康状態が原因で雇ってもらえないところがないので

すから、指導をいくら厳しくしても仕事には就けないのですが、「軽作業可」という診断をされていると、探せば仕事に就けるはずだ、と厳しく言われるようです。大阪で野宿から保護を受け居宅生活になったが、就労指導が厳しすぎて出てきてしまったという人にも会いました。疲れやすい体質のため、なかなか仕事ができないのに指導は厳しい。「自分のつらさは自分にしか分からない」という言葉が胸に残ります。その後居宅保護を受けられたのですが、行方不明になり、現在はどこにいるかわかりません。

3. 追い立て

都賀川での追い立て

これまで見てきたように、野宿している人の環境を激変させる原因となる追い立て。こうした追い立てがどのように行われていたのかを見ていきたいと思います。まず一番目立ったのが、都賀川の追い立てでした。2007年になって、都賀川の川沿いにはそれまで定住して暮らしていた人が誰もいなくなる、という事態になります。

2007年1月に、都賀川のある橋の下に住んでいる人たちに対し、工事があるからどいてほしいという要請がありました。その橋の下にはつねに2~3人くらいの人が住んでおり、土木・建設の仕事や缶集めで生計を立てていました。その後、3月には水管橋塗装工事という名目で、フェンスが張られ、橋の下に入れなくなっていました。中の荷物もすっかり片づけられ、そのときそこに居たはずの2人もどこに行ったのかまったく分かりません。神戸市水道局が行った工事でした。その後、橋の下に入る入口にコンクリートブロックが積み、閉鎖されているのを4月に確認します（コラム⑦写真2参照）。これでは次に工事をするときにも中に入れません。また壊して入るのでしょうか。

このことを水道局に確認すると「都賀川の近隣住民から、子どもが入って危ない、何とかしてほしいとの要求があった。そこで、兵庫県に要請して工事

コラム⑦ 都賀川流域の変化

神戸市灘区を流れる都賀川流域には、私たちが把握していただけても、最大時で30人以上が野宿していた（写真1）。その後2004年に遊歩道整備の工事が行われ、JR高架下などから多くの人が立ち退いた。

（写真1）都賀川のJR高架下。2003年8月



その後、2007年に入り、数人が暮らしていたある橋の下で、水管橋の塗装工事のため住んでいた人は出て行った。工事の終了後、4月にはコンクリートブロックで入れないように閉鎖されていた（写真2）。これほどガッチリと固めてしまうのは珍しい。

（写真2）橋の下を閉鎖するブロック塀。2007年11月



私たちは神戸市に対して、工事などで野宿している人に移動を要請する際には「一方的な追い立ては人権侵害」「保健福祉局などと連係して、次に住む場所や医療・生活保護・仕事などについて相談に対応できるようにすること」と申入れていて、市もそのように約束している。しかし最近は、そうした取り決め通りにはなされていないと感じることも多い。

をしてもらった」ということでした（この要求というのはかなりあやしいもので、ブロックで塞がれた橋桁の下に行くまでに、柵を越えた所がすでに何もない岸壁になっており、今も危ない状態です）。フェンスや張り紙などでの締め出しは多く見てきましたが、住んでいた場所にブロックをコンクリで固定して、中に入れなくするというのは、昔から夜回りしているメンバーも初めてとのことで、衝撃的なできごとでした。

その後、川沿いの公園、違う橋下などで定住していた人たちも、上記居宅生活の項に書いたように、身体の不調や火の不始末による火事で相次いでその場所を出て、入院や施設入所となり、結果、都賀川沿いには誰もいなくなります。こうして無言の「住んではいけない」という圧力がかかり、他の選択肢を示されないまま、行く当てのない人々を追い立てるという事態だけが進行していつています。

東灘での追い立て

もう一ヶ所、追い立てが激しかったのが、東灘区の港湾地域でした。まず2006年の9月、ある河口の橋の下に住むOさんのところに「2ヶ月のちに、橋の塗装工事を行う。付近の他の人たちも一緒に立ち退いてほしい」と神戸市みなと総局の職員が来たとの話を聞きます。工事が一定期間なら、その後戻れるはずだし、立ち退きの正当な理由がなければ、一方的に立ち退くことはないと話します。Oさんは、これまでも大潮時の浸水の被害で困っていたので、戻れたとしても戻りたくはないし、居宅のことを相談したいということでした。生活費くらいの年金はあったので、足りない家賃の分だけ生活保護を申請することにし、私たちの知っている大家さんに相談してアパートに入りました。

しかしその後、橋の塗装工事は未だに行われていません。工事を理由に追い立てられたのち、工事自体が行われないことがよくあります。「工事」は追い立てのための口実なのではないかと思っています。

しばらくして、塗装工事とは直接関係ないはずの、付近の空き地に廃車で暮らす二人の所にも、今度は

「自治会から苦情が出ている」などの理由で出て行ってほしい、とみなと総局が言ってきました。言われた当人は、顔見知りの自治会長に確認するとそんなことはないと言われたとのことでしたが、何度もみなと総局が来て、行く当てがあったこともあり、移動することになりました（襲撃の項で書きますが、同時期に襲撃もあり、そのこともきっかけになりました）。もう一人は、野宿生活のしんどさから、居宅生活を希望していましたが、私たちがうまく相談にのることができず、今は行方不明となっています。

野宿している人の減った理由

こうしてみると、追い立ては着実に、固定して暮らしている人を少なくしているという効果をあげているようです。と同時に、その後二度と住めなくなるということも行われ、野宿すらできない、誰もが身体をやすめられる空間のない街づくりが進んでいます（コラム⑧参照）。そして、追い立てられたその先が決して平坦なものではないことはあきらかです。テントをなくすことばかりに躍起になって、その後のフォローは福祉部局ではほとんどなされていないのではないかと思います。逆に直接追い立てる港湾などの部署の人が、行く先をフォローする様子がうかがえることがあります。きちんと福祉部局と連携して対応するべきでしょう。と同時に、追い立ての原因として市側の言う「市民の苦情」には、本来であればきちんと人権の視点から説明、啓発をすべきです。

そして、そういったフォローも受けられず、固定した場所でなく、転々として暮らさざるを得ない人たちの姿がみえてきます。例えば大阪の一部などでは、もっと激しい形での排除がクローズアップされますが、神戸でのこういった追い立てこそ、（排除そのものがあつたことすら分かりにくい）目に見えないかたちでの排除だと思います。そして、追い立てられ、テントもなく厳しい状態に置かれている人にほど、社会保障や福祉、支援の手は届いていません。行政は、自分たちが用意した仕組みに乗らない人々は、その仕組みそのものを見直すことはせずに、

排除していつています。それはじわじわとですが、
確実に行われています。私たちの活動では、それに
対抗するような取り組みまではできていません。

4. たび重なる襲撃

少年らによる襲撃

野宿している人が直面する困難の一つとして追い
立てとともに大きいのはやはり、襲撃でした。2006
年5月中旬、河川敷でテントを張っていた人の所に
数名の少年が来て石をぶつける、という事件があり
ました。その後、そこに住んでいた一人は、再度の
襲撃を恐れ別の場所にテントを移しました。

さらに11月、また同じ場所で、今度は違う人に対
し、テント周りに置いてあったその人の生活道具を
投げつけながら、「死ね」などという言葉を選びせ
る、ということがありました。このときはさらに、
当事者がテントから出てくると逃げ、入るとまた戻っ
てきて行為を繰り返すという状態でした。この2件
に関しては、そのつど神戸市広聴課を通じて教育委
員会に申し入れをしました。また、11月の件につい
ては、高校生である可能性も考え、兵庫県の教育委
員会にも申し入れをしました。2度目のとき、神戸
市教育委員会からは、生徒指導を徹底する旨の回答
を電話で得ました。

それから年を越した2月から3月にかけて、さら
に襲撃が起こります。場所は前年と同じ河川敷。や
はり集団で来て、投石と、罵詈雑言で、被害に遭っ
た人がテントから出ると逃げ、入るとまた繰り返す、
ということが続きます。少年らは、わざわざ遠くか
らこぶし大の石を拾い集め、襲撃をしに来ました。

さらに同時期、前出の東灘の港湾地域でも襲撃が
起こります。空き地に置いてある廃車に暮らしてい
た2人の所に石や物を投げてきたのです。2台の廃
車はガラスが割られ、使えなくなりました。1人が
自転車で追いかけて、3人の少年のうち1人を捕ま
え、近所の人が警察を呼んで交番に行ったそうです。
そこでは、その子の親も呼ばれたということですが、

コラム⑧ 見えなくなる「排除」

野宿者を閉め出すために、モノが置かれたり、
フェンスが張られることは以前からあったが、最
近はその方法が「洗練」され、「排除のため」とは
見えなくなってきた。歩道橋下の空間を例
に取ろう。

かつては歩道橋下に野宿している人がよくいた。
雨風をしのげ、通行の邪魔にならないからだが、
現在では、多くの歩道橋下がフェンスで閉鎖され、
鍵がかけられて野宿ができないようにされている
(写真1)。

(写真1) 三宮東遊園地の歩道橋下。2007年6月



また最近になって、神戸の三宮に、一見しては
排除であると分からないように、デザインを工夫
した歩道橋が整備された(写真2)。透明なアクリ
ルで閉鎖されているその下の空間は何にも使えな
い。排除であることすら見えない「洗練」された
外観である。

(写真2) アクリルで下が閉鎖された歩道橋。2007年5月



他にも、花が植えられたプランターやカラフル
な「オブジェ」が配置され、神戸の都市空間は
「野宿者問題」を不可視化するようにデザインされ
ていく。

「うちの子はそんなことしてません」という対応で、警察官が「現行犯ですから」と取りなしたといえます。その子は近くの中学3年生でした。もうしない、ということを約束させ、学校には言わないことになったそうです。

このように短期間にいくつかの場所で連続していたこともあり、エスカレートしてしまうことを恐れ、まずは直接河川敷の近隣の中学校に目星をつけて申し入れをしに行きました。その後、再び教育委員会へ報告と申し入れをしに行きました（巻末にこのときの申入書を収録しています）。

この一連の襲撃についてプレスリリースにまとめ市政記者クラブにも配布し、いくつかのマスコミから取材も受け、新聞記事にもなりました（巻末付録参照）。

この一連のことから得た感触について、書いておきたいと思います。

教育委員会との話し合い、教員の対応

教育委員会や市に訴えかけ、申し入れしていくことはこれまでもありましたが、襲撃の頻繁さへの危機から、今回は文書での申し入れをし、かつ近くの中学校に直接話をしに行ってみることにしました。その結果、灘区内の中学校の生徒指導の先生たちが集まり、野宿している人のところへの見回りが行われました。私たちが再度教育委員会に申し入れたことが、メディアで取り上げられたことが大きいと思います。同時に警察でも、見回りがされました。東灘区でも、個人的に何人かの先生が見回りをしたということでした。

私たちも、灘区の先生方に見回りに、1度同行させてもらいました。その場で、集団で野宿している人の家を訪問すると、威圧感を与えかねないという話をしたり、そもそも見回り・監視の強化ではなく、野宿問題への理解をしていないと襲撃はおさまらない、という話をしたりしました。そのために指導する教員や教育関係者自身の野宿問題の社会的背景の理解や人権意識を深めるための取り組みを、という話もしました。しかしそのどちらも聞き流されたよ

うに感じます。むしろ、野宿の問題を学校で扱うということに対し、強い拒否反応が感じられました。

これはなぜなのでしょう。別に中学校を訪問した際に、ある先生に野宿の問題を学校で教えてほしいと話をすると「子どもたちには権利を主張する前にまず義務を果たすことについて教えているから……」と答えました。それ以上は言葉を濁していましたが、すなわち「野宿している人は義務を果たしていない、その人たちの権利について教えることはできない」ということが言いたかったのではないかと思います。

また別のときですが「いのちの大切さを教えるのは大事だが、生きていくために何をしてもいいというわけではないからね……」と言った先生もいました。こういう発想は世の中のいろんな場面で見られます。野宿している人の現状を知らないが故に出てくる発言です。また、今ひどく生活に困窮している人の人権を守るという意識がまったくありません。

先生方がまず野宿している人の状況を知らないのだから、生徒たちにそれを教えることはできないでしょう。知らないだけでなく「野宿している人がそこにいることが悪い」という意識が見え隠れしています。先生方は、何か事件が起こらないように、見回りを強化し、生徒指導に励んでいます。しかし、野宿している人がなぜそこに住まざるをえないか、野宿から脱するのがいかに困難かを、考えるまでには至りません。これは何も学校の先生に限ったことではないのですが、今一番多く襲撃しているといわれる中高生を直接教える先生に、やはりしっかり野宿の問題を認識してもらうことが悲劇を防ぐ近道であると考えます。

根強い偏見

こういった中で、2005年10月姫路で起こった火炎瓶殺人事件（2005年10月22日未明に、当時高校3年生の少年1人と当時14～15歳の少年3人が火炎瓶4本を橋下の金網の中に投げ入れ、寝ていた男性を焼死させた事件）以降、姫路市内で教育委員会などとともに襲撃の問題に取り組んでいた姫路の支援グループの方から、興味深い話を聞きました。

姫路では襲撃をなくすため、野宿の教育への取り組みを始めたが、それに対し、議会で野宿問題の教育に批判的な質問があったというのです。その質問から少し抜き出して紹介します。

（前略）本市はホームレスを人権教育の教材に取り上げ、心の教育を推進するとマスコミが報じました。新聞によると、おおむね次のように報じられておりました（中略）。

この教材で何をどう教えるのか、どうなれば終わるのか。ホームレスを一つのカテゴリーに囲うことによって、逆に子供たちに画一的な見方を押しつけてしまうのではないか。（中略）

今、求められているのは人としていかに生きるべきか、公序良俗に反しない生き方の大切さを学ばなければならないのではないのでしょうか。そのことがホームレスを襲撃するような子供をつくらない、深夜徘徊をする子供をつくらない、期待族をつくらない近道ではないのでしょうか。

法律に触れなければ何をしてもいいんだ、他人に迷惑をかけなければ何をしてもいいんだという手前勝手な人間が余りにも多くなってしまったのではないのでしょうか。

（平成18〔2006〕年姫路市議会第2回定例会議事録〔第2日6月19日〕より増本勝彦議員発言。）

議会での質問は、しばしば市民の声や世論を背景にされます。この発言のきっかけになっていると思われる記事がweb上にあったので、引用します。

学校教育の限界を認識しよう

「ホームレスを扱った人権教材の開発?」。姫路市教委の担当記者にその話を聞いたとき、思わず耳を疑った。

同市内の少年らがホームレスを焼死させた事件を受けてのことだ。「心の教育」の推進を重く見た同市教委は、ホームレスの人権問題を考える教材を作成し、授業を行うことに決めたという。

人権は大切だし、市教委が対策を講じようと努力したことは理解できる。しかし、ホームレスになった理由は人それぞれ。ホームレスというひと

つのカテゴリーに囲って、彼らの人権を扱った教材まで作成する必要があるのだろうか?

第一いったい、どうやって教えるのだろうか?

逮捕された少年が卒業した中学を取材した際、校長が『『心の教育』と言うのは簡単だが、教えるとなると難しい…』と頭を抱えていたが、その教材が現場の悩みを解決するとは思えない。やはり大切なのは家庭教育であって、学校教育には限界がある。過剰な期待はしない方がいい。（淳）

（産経新聞「記者の独り言」ブログ、2006年5月9日（火）の書き込みより。http://sankei-kansai.weblogs.jp/kisya/2006/05/post_39b8.html）

一読では何を危惧しているのか分からないような文章ですが、つまり「ホームレスになった理由は、自業自得でなったものも含めてそれぞれなんだから、それも全部ひっくるめて人権がある、と教えちゃマズイでしょう」とでも言いたげです。

このように教育委員会が取り組もうとしても、偏見を持っている（市民に後押しされた）議員などから、このように政治的圧力がかかることがあります。

なんで学校で教えたくないのか

学校教育の現場では、成績を上げること、上を目指すこと、努力して向上することなどが良しとされ、それは結果で判断されます。落ちこぼれることは良くないこととされ、そんな中で「人生から落ちこぼれた」と多くの人に（しばしば当の本人にも）見なされている野宿者の人権を教えるというのは、そもそも学校教育の根幹にある考え方になじまない。だから、学校現場で野宿のことを、といくら話してもなかなか受け入れられないのではないかと感じます。

しかし本当はそういった学校教育のあり方のほうが、人間の生き方になじまないという気がします。

学校現場で先生方が野宿者について教えることを拒否する原因。それには大きく3つあると思います。1つは議会発言、市民の声などの政治的圧力。2つめはそもそも学校の価値観となじまないということ。

3つめが、先生方自身が持っている根強い偏見と無理解です。現場の先生方、その認識を変える取り組みを早急に行わないと、そこで学ぶ子どもたちによる襲撃は、なくなることはないと強く感じました。誰かが命を落としてしまう前に。その取り組みに関しては、まだこちらとしてもなかなかうまく働きかけができぬままになっています。

おわりに

始めに述べたように、目に見える形での野宿者数は減っていているといえます。しかしこれまでに見てきたように、野宿している人を取り囲む状況は、私たちの知り得る範囲でも好転しているとは言い難いものがあります。目に見えない形での野宿や不安定な層の増加。じわじわと追い立てる形での、選択肢の示されない（または貧しすぎる）行政の施策と排除。地域住民の苦情。それを反映するかのような日常的な襲撃と、殺人につながりかねない事件の増加。このような中で、でも私たちは自分たちにできることを地道に重ねていくしかないと思っています。

追い立てに関して、私たちが、野宿している人が追い立てにあったときに相談できる存在ではないのではないか。その信頼関係が築けているかどうか、大きな問題です。追い立てがあったとき、そこにいた人が何も告げずにいなくなり、後から追い立てのことを知るといこともたびたびありました。夜回りをしていく大きな理由は、その関係作りでもあります。それがうまく作れているか、見直していかなければと思います。

襲撃については、教育委員会や各中学の先生方など直接会って話す人たちに、少しずつでも現状を訴え、危機感を持ってもらうことを第一に、理解を深める機会をつくってもらい働きかけをしていきたいと思っています。

野宿している人だけでなく、これまで見えてこなかった様々な貧困が見えてきた2006年度であったと思います。首都圏や各地で貧困をキーワードにつな

がる動きも出てきました。この間新聞やテレビなどの報道でも、格差だけでなく、広範な貧困について取り上げられることが多くありました。ワーキングプアという言葉はすでに定着し、さらにはネットカフェ難民・マック難民などのあらたな言葉も出てきました。2006年の総務省の調査では非正規雇用が雇用全体に占める割合が3割だという報告が出ています（労働力調査・2006年平均）。雇用全体に占める非正規雇用の割合は、97年を境に正規雇用数を上回る勢いで増えています。

雇用の極端な不安定化にはそもそも、政界や財界の思惑が大きく影響しています。1986年に、派遣業法が制定。94年にはそれが改悪され、派遣できる職種は大きく広がりました。2004年にはさらに派遣は製造業界まで広がります。そして、1995年に日経連によって「新時代の『日本的経営』」が提言されました。労働を3類型（「長期蓄積能力活用法」「高度専門能力活用法」「雇用柔軟型」）に分けたこの提言の中の「雇用柔軟型」つまり、企業からすると便利に使い捨てられる労働者、という位置づけを明確にし、その整備をすすめてきました。こういった流れは、小泉政権下の規制緩和、構造改革の中でどんどんすすみ、日経連の思惑通り、そのことによる非正規雇用の増大が、不安定労働をせざるをえない人口を急激に増やしてきました。このことは（おそらくは意図的に）直接ホームレス問題としては語られていませんが、労働・居住のますますの不安定化の現象を語るうえで重要であり、野宿に至るか至らないかのギリギリの層が今後さらに増えていくであろうことを想像させます。

私たちと、野宿している人の境界はますます曖昧に、不安定な人々はますます広がっていていると感じます。自分たちのこととして、夜回りを中心に、これからも身近でできることを続けていきたいと思っています。

（なべたに よしこ）

コラム⑨ 更生センター・更生援護相談所

J R 難駅のそばに、更生センターという建物がある。ここは神戸市が生活保護法に基づいて設立した更生施設で、現在は住むところのない男性が入る施設になっている（女性は入れない）。3階が居住空間で、そこでは畳2枚程度の空間が占有でき、3度の食事が提供され、週2回入浴できる。

入居すると内部作業（内職）や外部作業（草刈など）、掃除当番などがある。6人部屋・4人部屋なので人間関係が難しく、そのため入所を希望しない人も多い。小遣いは月2000円。禁酒を求められる。定員50名。

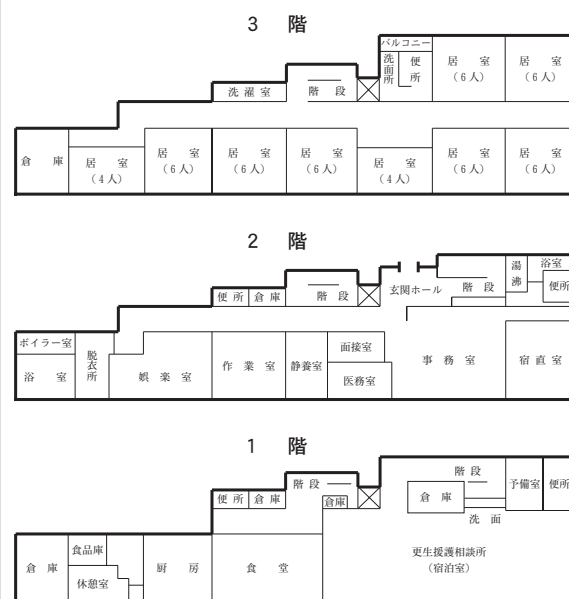
同じ建物の1階部分（2階が入り口なので地下のように感じられる）が更生援護相談所という社会福祉法に基づく神戸市立の一時宿泊施設である。夕方記名すれば無料で宿泊できる。朝8時ごろには出なければならない。ただ、雨の日は昼間もいることができる。また病気であれば、晴れていても、昼間もいることができる。



（写真）更生センターの外観

更生援護相談所での食事は年末年始には出るが、年明けから次第に減っていき、3月頃からは出なくなる。それでも1日にパン1個が、位置づけははっきりしないものの提供される。シャワー・入浴は3週間に一度くらい。2段ベッドなどで80床ほどあり、年末年始には100人以上が宿泊する。更生センターと更生援護相談所という2つの施設が同じ建物にあり、職員も同じなので利用者は混乱する。下（更生援護相談所）に泊まると風呂も食事もなく、毎日違うベッドで寝ることになり、前に泊まった人がシラミなどを残していくと痒い思いをする。

（図）更生センター平面図



職員が「弱っている」と判断すると、「上にあがるか（3階の更生センターに入所し生活保護を受けるか）」と声をかけるので、「職員に気に入られた人には食事が出て、風呂にもはいれる」と誤解する人も少なくない。

週2回（月曜と木曜の午後）嘱託の医師による診察がある。急病であるか重篤ならばすぐ病院に搬送される。そこまでの状態ではなくとも、医師が病気かもしれないと判断すると近くの病院で検診するよう手配される。

病院では最初は治療・投薬はせずに診断結果だけを更生援護相談所に連絡する。その結果、病気だと診断されると、相談所は「医療券」を発行し、ようやく治療を受けられるようになる。治療を受けるためには更生センターに入所するか、（原則として）相談所に宿泊しなければならない。自分の住んでいるテントやそこでの仕事、飼っている犬や猫が心配で相談所に泊りたくないという人は医療を断念するしかない。

コラム⑩ 神戸市の低家賃施設

更生センター・更生援護相談所のほかに、自分で収入がある人のために「兵庫荘」（神戸市立）という一泊50円（月1500円）の施設がある。また「磯上荘」（神戸市社会福祉協議会）という一泊200円（月6000円）の低家賃の施設もある。どちらも、仕事が途切れて家賃を払えなくなると出されてしまう。

第3章 活動で出会った人々からの聞き取り



山本かえ子・中村祥規・鍋谷美子
頼政良太・野々村耀・江口怜

》藤原さん「猫がおらんかったら、こんなところにはおらん」
》小川さん「自分でやっていけるうちは働きたい」
》テツさん「野宿生活をしていたあるアルコール依存症者の仲間の声」

●写真 小川さんが住んでいた、歩道橋下のテント。ここを拠点に荒ゴミ集めをしていた（2007年5月23日）

はじめに

第3章では、これまで夜回り準備会の活動の中で出会った人々のうち、3名の方々に語ってもらったライフヒストリーを載せています。一人は現在も野宿生活をしている方、一人は野宿生活の間に入院し、その後年金で居宅生活をしている方、一人は同じく野宿生活から入院し、AA（アルコホーリクス・アノニマス）に通いながら居宅生活をしている方です。それぞれの方への聞き取りを行い、テープ起こしをしました。紙面の都合上、どれも実際に聞いた話よりは少し短くなっています。

夜回り準備会の報告書は、今回が3回目の発行になります。第1回目の『2004年度年間活動報告書』では「活動から見えてきたもの」として、野宿生活をしている人々の置かれている現状を、医療や追い立てといったテーマ別にまとめて書きました。その結果、野宿している人々が直面する問題が浮かび上がってわかりやすくなった反面、そういった問題がそれぞれ複雑にからみあっている実態が上手く表現できなかったという反省がありました。

そこで第2回目の『2005年度年間活動報告書』では、私たちが活動の中で出会った人々のことを、自分たちがつけている記録にもとづいてまとめました。個人に視点を置いたことで、問題の連続性と複合性が見えやすくなり、書いているメンバー自身も、一人一人の人生の重さを実感させられました。

ただ、これらは私たちが出会ってから知っている限りのことを書き留めたに過ぎず、当のご本人はどのように考えているのかを知ることはできませんでした。また、私たちが会おうまでの状況、なぜ野宿になったのかといった経緯などについては、当然のことながらまったく書くことができませんでした。

そこで、今回の報告書をつくるときに、メンバーの間から「今年は直接、野宿している人に話を聞いて記事にしよう」という声があがりました。試しに何人かの方にそれぞれお願いしてみると「いいよ」という返事をいただきました。そこで、みなさんに現在の生活に至るまでの経緯と自分の考えについて、それぞれ語ってもらい、それを書き起こしました。

みなさん、これまで何度もお会いしている方々なのですが、いざお話を聞いてみると、これまで出会って話をしていたときからは想像できないほど深い人生談が飛び出してきました。「ホームレス」という一言では決してくれない、かけがえのない、それぞれの人生模様。「一人一人違った人間なんだ、それでいい」といったような言葉ではすまされない重みを持って、私たちに迫ってきます。避けられない時代の流れや社会の変化、一度犯してしまった失敗、予期せぬ身内の死……。こうした色々な出来事や思いについてうかがいました。

（やまもと かえこ）

「猫がおらんかったら、こんなところにはおらへん」

聞き手・山本かえ子 中村祥規

■ 藤原さんは公園の木の間にテントを張って野宿している。夜回り準備会でも長年継続して訪問している人である。荒ゴミ集めを仕事にしている。藤原さんは、テントで数十匹の猫と一緒に暮らしている。それも、ただテントに住まわせているだけではなく、熱心に世話をしているのだ。捨てられた子猫を拾ってきたときは2〜3時間おきにミルクをあげたり、予防注射や去勢手術などにも連れて行ったりしている。そんな藤原さんはこれまでどのような人生を歩んできたのだろうか？ 動物と暮らしていることについてや、野宿生活についての考えなどもあわせて、藤原さんにインタビューをさせてもらった。

野宿になるまでの生活

生まれと家族

昭和25（1950）年、神戸の元町生まれで、今57歳になる。父親が台湾人、母親は日本人で、長田で育ったんや。国籍は日本で、藤原は母親の姓。ハーフとって苦労はせえへんかった。

亡くなった父親は貿易商で、金持ちやった。動物がたぐさんいて、世話しとった。犬猫、うさぎ、台湾カメ、にわとり、あひるなど。やから、その頃から猫飼っとったよ。父親は香港や台湾に行ったりするから、行くと2〜3ヶ月は帰ってけえへん。帰ってきても1週間ぐらいいしかおらへんかった。父親は家に居ったときも起きてくるのが遅かったから、動物の世話は自分がやとった。家でも、猫だけで40匹ぐらいいてね。18年ぐらい生きとったよ。

コックとして働く

中学3年の頃に、年をごまかして三宮か元町あたりで働き始めた。ふけ顔やし、金のたまご、の時代やったしね。板前や中国料理のコックをやとった。料理店で働いていたときは、父親の姓の陳と名乗って働いとった。朝の3時まで働いとった。

せやけど、自分の上に、12年間一日も休まなかった人がいたりするから、頭があがらへん。一ヶ月500時間働いたとか、1年に3日間休んだと言ったら笑われたで。そういう時代やったんや。その代わり、

当時中卒の給料が月8,000円の時代に、15,000円か20,000円ぐらい、倍の給料をもらとった。

働いていた頃は、朝8時から夜3時まで営業し、片づけをして4時に帰宅、風呂に入って5時に寝る。だから3時間睡眠。こんな生活を続けとったから、精神的にも肉体的にも頑丈になったんやと思うで。みんな1時や2時まで働いとったから、へとへとで寝てしもうて、金を使う暇もなかった。夜2時やったら映画館も開いてへんし、キャバレーなんかも行ける年やなかったし。30分の休憩のときに、ズボンを買に行ったり下駄を買に行ったり。買い出しや何やかんやで市場に行く途中で、コーラを飲んだりするのが休憩やった。昔は個人経営の店も多かったから、残業時間は関係なかったん。

元町には15歳から17、8歳までおった。その後子園に行って、21歳頃、鳴尾の料理店を買取って中華料理店を開いた。鳴尾の店は3年ぐらい経営とった。近くに武庫川女子学院があって、昼は繁盛しとってんけど、夜はさっぱりやった。そこで鳴尾の店を売って園田に店を持った。そんなとき、一緒に父親の家やなんかも売った。そんで、家で飼ってた犬猫もおらへんになったから、単身赴任みたいになかたちで園田の店で働いた。その後新在家、大安亭市場の近くと転々として、大安亭市場の頃は店舗を借りて営業するようになった。

コック長や副コック長になったりすると、若い子を飲み連れて行ったりせんといかんからなあ、下っ端で給料いい方がええで。僕らは飲んで二日酔いで

も朝から働けるけど、若い子は二日酔いになったら翌日休んでしまうから、3人も5人も休んでしもとる。そしたら、誰が飲み連れて行ったのかがばれてな、オーナーに怒られたりしたわ。

新聞配達店の仕事

その後、女性と別れたことや何やかやで包丁を置き、新聞配達店の支店長を10年ほどやった。お金はそこそこもらえてたけど、責任が重かった。店が増えてくると、なんかあったときに店長会議にかけられて、自分の責任になる。

店でも、例えば自分がアイスコーヒーを飲んでいけるのをパートのおばちゃんに見られたら、みんなにおごらなあかんようになって、月に5万円ぐらいとんでいってまうわ。自分の性格で、そうしてまうんやけどな。別に自分の小遣いから出すからかまへんけど。新聞配達の仕事は面白かったけどしんどかったわ。

新聞配達の仕事は、朝2時に始まる。2時に新聞が運ばれて来て、5時までチラシ折り込みなんかの作業をする。配達に出かけていったら終わりやなくて、パートの人なんかは帰るが、自分は残らなあかん。客から「新聞がぬれている」とか、誤配なんかのクレームが来んねん。絶対1日7件ぐらいクレームがあるから、それらに対応して走りまわらなあかん。

そこで休めるかといったらそうやない。11時からチラシを折る作業をせなあかん。50枚以上のチラシがあるときは2回やらなあかんねん。終わって時間があったら昼ごはん食べにいった、そしたら午後3時に今度は夕刊が来て、また折込をせなあかんようになる。配達が出て終わりやと思ったらそやなくて、またクレーム対応をせんとあかん。そしたら夜10時。寝る間ないし給料よかったから、晩飯食べがてら翌朝の朝刊が来るまでスナックに行って酒を飲んどった。2時になって「新聞来るから帰るわ」と仕事場へ行く。家に帰る暇がない。たまに家に帰っても、2時間寝るぐらいで、水道を使わないこともあった。給料50万ぐらいもらっとったけど、スナックに払っ

ていたようなものやった。スナックが家みたいな状態やったね。だから、今ゴミ集めで朝4時まで働いたり、猫の世話で2時間おきに起きなあかんかったりするのには平気。その後、かわいがってくれていた社長が亡くなり、リストラされた。

新聞販売店を辞めた後、ラーメン屋でアルバイトした。大倉山のとんこつラーメン屋、24時間営業のところで、18時間ぐらい働いた。経営者がけちやったこともあって、やめた。一時期知り合いのところに間借りしとったけど、猫を飼い始めたし、出て行った。それから現在の（野宿）場所へ来た。昔よく来た場所やったから、よくこの辺の地理を知っとるのもあって、ここに来た。ここはもう10年ぐらいになるのかな。震災後に来た。貯金はかなりあって、野宿のはじめはそれを使いながら暮しとった。大分後になって貯金がなくなってきたから、ゴミ集めなんかを始めた。荒ゴミ集めは、誰にも教えてもらわんと自分で覚えたで。わしは好奇心強かったし、すばしっこいな。猫の世話もせなあかんかったから、働き始めたようなもんやった。

年金は中途半端。勤めていたときに10年と少ししかけていたはずや。餃子店の店長を3年ほどして、やめた後に失業手当をもらって2〜3ヶ月でもゆっくりしたらよかったと思ったが「めんどくさいしええわ」と、せっかちやからすぐに働いてしまった。貯金もあったしね。住友生命や日本生命にも掛けとった。郵便局の簡易保険も18年ぐらい掛けとった。何の保険か分からへんけど、15年で満期やったのか300万円ぐらい返ってきた。これはホテル代かなにかわからへんけど、使ってしまった。

女性関係

結婚はしてない。恋人はたくさんおった。子どもの頃からもてとったんやけど、これは七不思議やな。わしは背が低いのにな。年とってからわかったんやけど、まめやからもてたんやと思う。わしは料理もパツとつくれて、女性を喜ばせられたからかな。掃除も洗濯も好きでよくやっていたし。ものすごいきれいな子をしょっちゅう自分の女にしてたけど、よ

く考えると、なんであんなきれいな子がわしの女になってたんやろうと思うわ。身持固い女の子は、誠実でパリッとした、スーツ着たようなやつが好きなんやろうけどな。わしはというと、不良というか、崩れた感じの遊び人間で……。だからまめなんが一番なんとちゃう。なんであんな変なおっさんがあんなきれいな子連れとんねん、といわれたで。世の中、蓼食う虫も好き好きやな。スナックのママに何百万もつぎこんでた金持ちがおったけど、結局は変なおっさんのわしになびいた。日本の不思議や。お金なんかと違って、まめなのがええんかな。

現在の野宿生活

動物と一緒に暮らす

犬猫の世話はボランティアのようなもんや。捨てられた犬猫にも生きる権利があるからな。今の野良猫は1～2年ぐらしか生きられへん。母乳が与えられずミルクだけやったら免疫つかへんわ。この年になったら犬はよう飼わんで、見つけたら動物愛護のボランティアに渡す。保健所に連れて行くとすぐに殺すから、持っていけない。猫も動物好きの人がときどきもらいに來ることがあるな。ときどき、無惨に殺された猫を見つけるけど、そんなのはちょっと考えられへんで。動物が嫌いや好きという問題を超えとるわ。

「野宿してたら冬は寒いやろ」と言われるけど、猫がたくさん居て暑いぐらいやで。他、犬の散歩代行や留守のペット預かりなんかもしている。

周囲の人々との関係

通行人には、僕自身からはしゃべりかけへん。「怖い」とか言われるしな。向こうから話しかけてきたら応対するよ。そしたら気心が知れてくるんや。中には「このおっちゃん、私らは年金生活でしんどい思っているのに、野宿で猫を育ててるんやわ」と感動する人もいる。逆に「こんなところにおってうっとうしいな」と思っているやつもおると思う

で。猫嫌いな人もいるやろうしね。近くを歩いている親子で、子どもは「猫かわいいなあ」とよってくるけど、母親は顔色を変えていたりする。

人間、死ぬのは一回やから、ばたばたしなくてもええやんかと思う。わしは、野宿してて3日、5日食べられなくても悲壮感はない。性格からやろな。一週間食べないと体力が落ちてくるけど。人間も、猫もいつかは死ぬ。だから、別に何も悲観することもない。わしはいちいち、「景気が悪い」「政治が悪い」とか言ったことはない。「誰か役人がわいろもらってたとか悪いことしてた」とは思うけどな。

野宿への考え

自由に生きたい、好き勝手に生きたい。20歳で物心ついて、70歳で終わりや。わがままやから「もっと早く野宿しとったほうがよかった」と思うぐらいや。「うるさいな」と思う人間関係から逃れて、ルンペン生活しとったらよかった。収入50万も60万も大して変わらへん。別に権力とか何億ものお金があるわけやないのに、人間は足のひっぱりあいとかする。そうやって上に昇進しても変わらへん。

ここで野宿するのは、市民の散策場所やから、好ましいこととは思わへん。ヒッチハイクで寺の境内に泊めてもらったりとかいうのとは違う。もともと公園は生活するところやないからね。わしも猫がおらへんかったら、こんなところにはおらへんで。

地震が起きたとき、テント張るんは仕方ない。仮設住宅なんかすぐにはできへんし。人がかたまっている場所には救援物資とかたくさん集まるけど、小規模の集落なんかなかなか支援がいかへんからな。だから、緊急とか天災とかは、家からものをとられたくないから、テントを張るのも仕方ない。でも、わしらは違うやんか。

意志の弱い人は、盗んで刑務所に入ったりする。教会で週3回の炊き出しがあるから*、そこに行って飯もらったりしとれば、盗む必要なんかないと思うけどな。「刑務所のほうが建物の中やし、ごはんも出るから盗む」ということもあるのかな。

わしらは犯罪をおかしていないから、いろいろあ

たけど堂々としておれる。借金取りに追われたりもしてへん。友だちで、数十万円借りたら数百万円請求されたりしたやつもおる。わしは、店を持つとき借金したけど、銀行から定期の分割で借りて、返した。

生活保護の話を公園管理の人がしに来るときがあるけど、断る。性分やろかな。生活保護は欲しい人にやったらええねん。生活保護費もらって、パチンコかなにかにつぎ込んでしもて、次の日からゴミ集めしとる人もいる。今の世の中、若い人・フリーター

は年金をかけられなくて生活しんどいやろなあ。

ここにおいてええとは思わへんが、金がない。宝くじでもあたったら、猫を誰かに預けて、単身で横浜あたりで板前でもしたいなあ。でも、馬力がないから料理の仕事はついていかれへんやろなあ。60歳前になると体力がたりへんから、鍋はもう振れへんわ。

※ カトリック社会活動神戸センターが中央区の小野浜公園で行っている炊き出しのこと。

②小川さんへの聞き取り

「自分でやっていけるうちは働きたい」

聞き手・鍋谷美子 頼政良太

■ 小川さんと出会ったのは、小川さんが国道2号線沿いの歩道橋の階段の下でダンボールで寝ていた時だった。しばらくして近くにテントを建て暮らしだしてから、ゆっくり話をするようになった。高齢だったことや、年金があるという話は何度も出ていた。それでも困ったらまた相談するわ、と話しているうちに、体を壊し、入院したのをきっかけに年金を受けることになった。現在はアパートを借り、年金と荒ゴミ仕事の稼ぎで暮らしている。中学を出て養子に出され、妻も亡くしてから、小川さんはずっとひとりだった。野宿生活をし、新たな関係の中でできた「家族」についても語ってくれた。

野宿になるまでの生活

田舎での生活

名前は小川。昭和7（1932）年10月3日生まれで、今年で75歳になる。田舎は徳島県の三好郡池田というところや。今は灘で部屋を借りて、年金と缶集めやら荒ゴミ集めの仕事をして暮らしとる。

もともとは鎌倉って姓で、5人兄妹の末っ子やった。兄が2人、姉が2人や。俺は三男やな。兄弟の関係は、長男、次男、長女、次女、最後が俺や。今は長男と長女が徳島にいただけで残りは亡くなってしまった。長男はもう84〜5歳になると思う。やけど、俺は中学を出てすぐに小川の家で養子に出されたから、今は全然連絡はとらへんけどなあ。後で詳しく言うけど、明石のマンションを出たぐらいから連絡はとらなくなったわ。

養子に出されたところは、嫁さんの叔母さんの家で、嫁さんももともと小川っていうんや。やから小川っていう方がしっくりくるなあ。

中学を出て、養子に出されてからすぐに百姓として田んぼで働いとったよ。ほんで、嫁さんと結婚したのが24歳ぐらいやったかなあ。嫁さんはもともと大阪に住んでたんやけど、結婚するためにわざわざ徳島まで来たんや。

大阪での仕事

その後だいたい2〜3年くらいして2人で大阪に出たんや。確か昭和34（1959）年か35（1960）年ごろだったと思うんやけど。大阪では西淀川のあたりで働いとったよ。

何で大阪に行ったかちゅうと、嫁さんがもう田舎がいやになってしもうたんや。だいたい2〜3年くらい徳島におったかねえ。その後は大阪の西淀川の

鉄工所で働いたんやが、最初は嫁さんの姉の婿さんの工場で働かしてもらった。ちょうど1年くらいでそこを辞めて、もっと大きい工場に移ったんや。そこも西淀川やな。その後はずっとその工場で働いたんや。多分20年くらいはそこで働いたんやないかな。

おっきい工場では、グレーンと言って、荷物の積み下ろしやらをやる仕事をやっていた。このグレーンちゅうのは、天井について、下にきたトラックから荷物を降ろしたり、逆に積み込んだりする仕事やな。グレーンを操作する人と、下で荷物にひっかける人の2人で作業するんや。このグレーンは免許がいるんやけど、それが結構難しいんや。試験でも10人受けたら6人ぐらいしか通らんのちゃうかな。このグレーンを工場におる間はずっとやっていたよ。やから、20年くらいグレーンをやっていたちゅうことや。

嫁さんの病気

この仕事を辞めたのがだいたい50歳くらいのころやったと思う。そのころ嫁さんが乳がんになってしもうて、ずっと入院していたんや。多分半年くらいは入院しとったと思う。手術したときにはもう手遅れでねぇ……。あちこち転移してもう駄目やったわ。

嫁さんが入院しとる間はずっと病院から工場に通った。しかし、嫁さんは結局乳がんがで亡くなってしまった。やっぱりその時はショックやったなぁ……。ずっと2人で暮らしてきたからなぁ。つらかったわ。

嫁さんが死んでからも少しは工場で働いたんやけど、やめて退職金を嫁さんの入院費にあててしまった。だいたい140～150万円くらいやったと思う。嫁さんが亡くなってから入院費やらの諸々の請求が来たんや。

パチンコの仕事

その後、ショックで何もしてなくてフラフラしてたんやけど、少し経ってからパチンコの仕事をしたんや。なんでパチンコの仕事をしたかという、まあ手っ取り早かったからやな。それまでずっと嫁

さんと2人暮らしやったし、一人暮らしは大変そうやと思って住み込みで働けるパチンコ屋で働くことにしたんや。グレーンの仕事に戻ろうとも思ったんやけど、やっぱり一人で暮らす自信がなくてね。その点パチンコ屋なら、住み込みで向こうが世話をしてくれるんやから。もともと住んどった家を借り続けることはできたんやけど、パチンコの仕事は住み込みやから解約したんや。家を借りとって帰らへんし、意味ないからなぁ。

パチンコの仕事は、グレーンの仕事と比べて楽なんやけど、やっぱりうるさいな。空気も悪いし。俺の耳が悪くなったのもそのせいかもしれん。パチンコの仕事をやった時は、尼崎のパチンコ屋で働いたんや。多分14～5年くらいおったんやないかな。友達はいっぱいおったんやけど、一緒に働いた奴らはもうほとんどやめとる。店が改装するときにぎょうさん辞めたからな。店に残ってくれと言われたのは、たぶん5・6人くらいやったと思う。おれもほんとはそんな時に店に残ってくれと言われとったんやけど、その尼崎のパチンコ屋はやめて、西宮市の鳴尾のパチンコ屋に移ったんや。ここは5～6年くらい働いたんや。何で鳴尾の店に行ったか言うと、そっちの方が条件が良かったからや。知り合いもおったしな。仕事の内容は尼崎も鳴尾も一緒やったし。

仕事をやめてから

ほんで、パチンコの仕事をやめたのが、70歳前後やったと思う。仕事ができんことはなかったんやけど、どうにも体がしんどくてね。病院にも通ったんやけど、病気とは診断されなかったわ。ほんとに体がだるかったんやけどなぁ。やめた直後は、他の仕事をしようと思って、すぐに仕事を探したんやけど、見つからなかった。まあ歳が歳だし、仕方ないけどな。

その後、2年くらいは貯めたお金で遊んどったんや。こん時は尼崎でマンションを借りとった。と言っても宿に泊まったりすることも多かったんやけどな。遊んだ時は酒も飲みよったんやけど今は飲まへん

な。遊んどる間に、結婚の話もあったんやけど、邪魔くさいと思ってせんかったわ。やっぱり一人の方が気楽でいい。一緒に暮らしとったら、あれしろだとかいろいろうさいやろ。嫁さんの時がそうやったからな。

年金をもらい始めたのがたぶん68歳くらいの時やったと思う。前の分までさかのぼって一気に950万くらいは入ってきたわ。仕事をやめてからもらったと思うんやけどね。年金の申請は嫁さんの実家の住所（その頃嫁さんの弟が住んでいた）を借りて申請して、その後尼崎でマンションを借りて住所をそっちに移ったんや。年金は工場で働いとったやつとパチンコ屋で働いとったやつがあった。嫁さんの治療費やなんかで、田舎の兄に借金をしてたんやけど、それも年金を使って全部返したわ。そこでほとんど関係は切れてしまったんや。借金も返したし、もう関係ないって感じやな。本当に連絡せんくなったんは、もっと後やけどね。

やけど遊ぶのに金を使ってしまって、借金を作ってしまったんや。その時は、年金を担保にしてたんや。多分100万円くらいやったと思う。今から考えると、ばかみたいに金を使いよったな。夜の街やったら金に羽が生えて飛んでいくからな。もうあんな金の使い方はできへんわ。今は使うとしても、タバコだけやな。酒も飲まんようにしとる。

その後は結局、尼崎のマンションも払えんようになってしもうて、（現況届が出せなくなったから）年金も止まってしまったんや。その時、借金の返済も止まってしもた。それでマンションも出んとあかんくなった。4年くらいは止まっとったと思う。今の仕事（荒ゴミ集め）はお金がなくなってから始めたよ。それから、これくらいの時から田舎とも連絡は取らんくなったんや。その前までは連絡を取ってたんやけどな。やから父親は中学を出て亡くなったのは知っとるんやけど、母親がいつ亡くなったかはわからんや。

もともと兄の嫁と仲が悪かったし、姉ともそんなに仲は良くなかった。まあ中学出てすぐに養子に行ったからな。田舎に帰ろうとも思わなかった。今でも

5人兄弟で何で俺だけ養子に出されたのかが頭から離れんわ。やからもう田舎は関係ないと思っとるんやけどね。借金も返したしな。今では山本さん^{*1}と夏子（山本さんが拾い、小川さんが飼っている猫）が家族のようなもんや。

野宿になってからの生活

初めての野宿生活

尼崎のマンションを出た後は、はじめ明石の大蔵海岸におった。明石へは尼崎から自転車でいったんや。公園の屋根の下で寝起きしとったな。荷物は全部マンションに置いて来て身軽だったわ。この時はしんどかったな。1食メロンパン半分で1日2食を1週間過ごしたんやから。朝コンビニで100円のメロンパンを1つ買ってまず半分食べる、残り半分は夜に残しといて、夜になったら食べる、といった感じやな。水は公園の水道水をつかっとった。公園やから雨もかかるし、なにより寒かったな。いまから考えると、ようあれでやっていけとったと思うわ。ほんとに。もうあんな生活はできへんな。

その後、神戸に戻って2号線のローソンの近くで暮らすようになった。たまたま明石から帰ってきたときに、そこで野宿してる人が飯を炊いとして、「おっちゃん飯食ってんのか？ないんやったら食っていきや。」って声をかけられてな。その時はほんまに腹が減ってたから、その言葉に甘えたんや。それからそこで暮らすようになったんや。尼崎のマンションは借りたまんまやったわ。明石へも部屋の鍵を持ったまんま行ったんやから。2・3回くらい部屋に帰って飯を作ったこともあるわ。マンションは連絡とれんようになっても2〜3か月は大丈夫なんや。それ以上ほったらかしとると鍵を変えられたりして入れんようになるんやけどな。やから明石に行く時は、マンションの荷物やら何やらは、全部置きっぱなしで出てきたんや。多分その荷物は大家さんか誰かが処分したんやろな。2号線におるときもその荷物は持ってこんかったんや。

野宿をしながらの仕事

そこで、そこで暮らしよるときに、たまたま小河さん^{*2}が缶を売りに行く途中に会って声をかけられたんや。その時に缶を集める仕事のことを教えてもらって、それをやりはじめたんや。それまではなんも仕事をしてなかったからなあ。

その後、小河さんが入院することになって、テントにおってほしいと頼まれたから小河さんのテントに移ったんや。テントに入ってから自炊するようになったわ。いっぺんにたくさん炊いても保存ができんから、だいたい一回で2合くらい炊いてた。炊きすぎると、べたべたになって食えれなくなるんや。2合で約2食分くらいやな。おかずは近くのスーパーとかで買ってきて食いよった。テントにおるときは、飯に関してはしっかり食えとったわ。明石のようなことはなかったよ。

その後、小河さんが退院して、二人で協力して新しいテントを建てて、そっちに移ったんや。俺と小河さんでダブルオガワやな。そのテントに移ってから仕事を本格的にやり始めたなあ。荒ゴミ集めも始めたんやけど、その仕事は山本さんから聞いたんや。仕事にも縄張りがあって勝手に取ったりできんのよ。それまではそんなこと全然知らなかったんやけどな。

テントにおる間は、荒ゴミで食っていけとった。冬は寒いし、やっぱりしんどかったけどな。その時から、年金はもう一度もらえるようになると思っただんやけど、いつまたもらえるんかはわからなかったわ。とにかくもらえるっちゃうことだけしかわかってなかったってことやな。実際にもう一度もらい始めたのは、病院に入院してからやしな。

あと、そのころ歯が痛くて更生センターに行ったことがあるんやけど、治療するには泊まってもらわんとできん、て言われて、それが嫌やったから結局治療は受けなかった。俺は集団生活とかできんからな。短気やからね。あんなところに入ったらすぐ喧嘩してしまうわ。治療する間はずっと泊らんといかんかったから無理やと思ったね。テントにもよく更生センターの人が来て、センターに来るように勧められたりもしたがなあ。やっぱり一人の方がよく

て全部断ったよ。あそこじゃあ結構規則があるらしいしな。歯の治療するのに泊まらなあかんって言われた時点で、俺はダメやと思ったけどな。

入院、その後

ほんで、年金をもう1回取ろうと思っていろいろな話を進めるときに倒れてしまったんや。1回目は喫茶店で倒れて病院に運ばれたんやけど、その時は大したことなく、すぐに出てきたんや。やけど、その4～5日後にもう1回倒れてしまって、そのまま入院してしまった。4～5日くらい意識がなかったんやけど、何とか回復できたわ。その時には、夜回りの人たちも見舞いに来てくれとったらしいんやけど、俺は意識がなかったから覚えてへんのや。この時の治療費とかは後で払うことにしたんや。

結局腎臓が悪かったらしい。病院には4か月くらいいたな。結局、入院中に山本さんに住所を貸してもらって年金を申請して、年金がもらえたら退院することにしたからやけどね。まあお金がないのに退院はできんしなあ。最近はその人は出ていかせる病院が多いみたいやけど、俺の入院したところはずっと入院させてくれたんや。その点は良かったと思う。それで、退院してから今の部屋を借りたんや。年金が入るようになったら、これまでもらえてなかった分も一気に入ってきたから、それで借金も返せたわ。

今も病院には通っとるんや。まだ検査もせんといかんらしいしな。自分では大丈夫やと思うんやけどね。まあもう一回倒れるようなことがあってもたいへんやしな。それと、歯医者にも通っとる。前はセンターのせいで行けてなかったからな。歯が丈夫になればもっと硬いもんも食えるし、今より良くなってほしいよ。

今の暮らし

今も仕事には行きよるよ。やっぱり年金だけやときついからな。家賃もあるし。今の部屋の家賃が月5万で、今もらっとる年金が2か月で15～16万くらいやな。なんか世間で年金についていろいろ問題になっとるけど、そのせいか知らんが、年金はだんだ

ん少なくなっとな。前はもうちょっと多かったと思うんやけどな。まあ何もしないのは嫌やし、仕事で動くのはいいと思うんやけどな。何もせんってのはやっぱり俺の性分やないからな。何もせんかったらほんまに病気が悪化しそうやしな。いい運動になっと思うわ。荒ゴミ集めとか結構歩きまわるからな。

今の部屋に移るときは、テントから荷物は持ってこんかった。というよりも、持ってこれんかったって感じやな。テントはもうぐしゃぐしゃやったから。やから、今の部屋の荷物は部屋を借りてからそろえたんや。しかし、こうやって部屋に住めるってのはすごいことやと思う。テントにおったころは、別に普通に暮らしとったけど、今前のテントに戻れてって言われても生活していけへん気がするわ。あの頃は、よく生活しよったと思う。冬なんかよう辛抱しとったよ。

今までで一番しんどかったこと

今までで一番しんどかったのは、やっぱり明石の大蔵海岸にいたころやと思う。満足に食うもんもないし、水はその辺の水道水やし。1日が100円のメロンパン1個やからな。それに、夜寝るのも公園の屋根の下やからものすごい寒いしな。夜はこごえながら寝とったんや。あれ以上にひどい状況はなかったと思うわ。今まで生きてきて、あれが一番しんどかった。このことは今まで誰にも言ったことがないんやけどな。人に言うのは今回が初めてや。

※1 小川さんが野宿するようになってからの荒ゴミ仕事仲間。高齢の小川さんを心配し、小川さんが入院したときに奔走。年金手続きを手伝うなどしてくれた。今も小川さんと一緒に自転車を走らせて仕事をしている。

※2 小川さんより以前から、私たちの夜回りで出会っていた人。近くにテントを建てて住んでおり、アルミ缶集めで生計を立てていた。

③テツさんの聞き取り

「野宿生活をしていたあるアルコール依存症者の仲間の声」

聞き手・野々村耀 江口怜

■ アルコール依存症は放置すれば8割が死に至る深刻な病気だと聞くと、今では多くの人が日常的に飲酒を続けている。アルコールが原因で仕事も人間関係も失い、野宿することになった人も少なくないが、メーカーも国も、飲めと宣伝するマスコミも責任を感じていない。そそのかされて飲んでいっているうちに依存するようになると、自分が病んでいると思えなくなる。去年の夏、テツさんから「飲むのをやめて1年になる」という電話をもらった。クリニックや自助グループに通って、断酒を続けさらに1年たった。夜回りで会ったときは、いつも酔っていて、話せなかったテツさんが、飲まずに暮らす喜びを語ってくれた。アルコール依存症のことをもっと知りたいと思う。

野宿になるまでの生活

アルコールの問題を抱えていた父

私は、昭和26（1951）年宮崎県の海に近い田舎町に生まれました。大学に行こうと思って高校に入ったのですが、1年の春に急性脳脊髄膜炎を患い、2ヶ月ほどで退院したのですが、完治するまで半年ほ

どかかったために、勉強についていけなくなりました。また、父が飲酒して暴れるので、なかなか勉強できず、2年に進級する頃には大学進学を諦めていました。父は農協の課長で、外面はいいのですが、家では酒を飲んで暴れるので、兄は勉強するために祖母の家に逃れていきました。父は現役時代も給料は母に見せず、アルコールにつき込んでいたようで、定年後も年金を酒にばかり使っていました。

母は市役所の福祉課に勤めていましたが、給料は安く、その上父と兄の借金は全て母のところに回ってきていました。

高校3年になり、就職先を探し、父の友人の紹介で大阪の紳士服関係の工場に勤めることになりました。裁断や縫製などの仕事を行う工場で、約7年間そこに勤めました。全体の仕事を見る生産管理課に行きたくて、全ての工程に関わりました。さらに、工場の近くの工業大学の電気工学科の夜間部に入学しました。会社の初任給は2万7千円、手取り2万円でした。大学までの交通費や月謝がかかり、さらに夜遅いため寮の食事をとれず、金銭的に困窮していました。おふくろに仕送りを頼みましたが、難しいと断られました。結局10月から翌年の3月まで休学し、4月に復学しましたが、経済状態はよくなり、3か月後に退学しました。その翌年、縫製専門高等学校という職業訓練校に通わないかと薦められ、2年間そこに通って卒業しました。将来的にはデザインや製図の専門学校に通おうと考えながら、まあ焦る必要もないだろうと考え、勉強もせずに酒を飲んで暮らしていました。この頃は南新地や北新地で飲んで遊んで朝帰りといったこともよくありました。

体の不調を抱えながら職を移り変わる

そんな中、不景気の影響で会社の方針が変わり、上司との折り合いも悪くなっていきます。会社は独立採算制をとり始め、社名も変わりました。私は裁断部にいたのですが、3歳年上で労働組合の委員長をしていた係長とうまくいきませんでした。結局26歳8ヶ月の時に会社を辞めて、阪急三番街の喫茶店で働き始めます。喫茶店もいろいろ任されすぎてしんどくなって辞め、いくつかの店を転々とします。最後に働いていた店を辞める直前に、椎間板ヘルニアを患い、29歳の時に田舎へ帰ることにしました。田舎で椎間板ヘルニアと骨粗しょう症の治療をしつつ、段ボールなどの処理をする会社で働きました。7年ほど一生懸命働きましたが、やっぱり酒の飲みすぎで失敗し、クビになりました。その後プロイラーをさばく会社で働きましたが、嫌がらせなどもあっ

て自分から辞めました。

その間、家でもごたごたがありました。母と私が実家に住み、父と兄は別居をしていました。兄が居酒屋を始めるための金が必要になり、父が勝手に母の預金を使い込んだりしました。他にも色々ごたごたして苦勞が多く、母はついに脳梗塞で倒れました。その後3年ほど母の面倒を見ましたが、それも難しくなって施設に預けることにしました。

平成元（1989）年8月、三菱自動車工業の名古屋製作所に期間工として働きに行きました。実家を離れたのは、母から離れて飲みたいという気持ちがあったからです。この頃から酒を飲んでブラックアウト（アルコールによる一時的な記憶喪失）することはありましたが、仕事には支障はありませんでした。2年ほど名古屋で働き、大型連休の時は実家に帰っていました。将来的には、実家の辺りで独立して縫製の会社を作ろうと考えていましたが、兄とぶつかり、その夢も消えました。

たびたび野宿をするようになってから

期間工から野宿へ

その後はトヨタの期間工をしたり、生地を染めて反物を作る会社に勤めたりと、愛知や大阪を転々としました。いったん家に帰りましたが、兄の顔を見たくないで約一年間車の中で寝る野宿状態が続きました。当時銀行の定期預金が100万あったので、それを担保に50万円借りました。担保の100万も引き出しました。150万のうち70万は困っている人に貸し、残りの80万円は4～5日でギャンブルと酒で使い果たしました。貸した金は20万しか戻ってきませんでした。最後の決まった仕事は、46～47歳のときにやった三菱の名古屋製作所の仕事でした（1997年2月～98年8月）。仕事はまじめにしていた問題なかったのですが、スナックやクラブ等で飲んで帰ってブラックアウト、一時的な記憶喪失になって、暴言を吐き、迷惑をかけることが続き、最終的にはクビになってしまいました。

寮を出なければならなくなったので、ビジネスホテルとサウナに泊まり、大事なものは駅のコインロッカーに預けて、3週間ぐらいい仕事をせず遊んで暮らしました。最終的には残金1万円になってしまいました。結局8月の後半からは半田市の公園のベンチで寝るようになり、9月のはじめに台風が来たので身障者用トイレの中で寝ていたとき、野宿している人と一緒に展望台に逃げ込みました。

仕事を探して

当時は野宿を始めたばかりでした。まだ大きな会社に勤めようと思っていました。当時47歳だったので、60歳まで13年ばかり働けば年金も貰えるし、なんとか10年を乗り切ろうと仕事を探していました。10月末にはホテルに就職できて、住み込みで働きましたが、寮の雰囲気に合わず、自分から寮を出て、西成で7万5千円のアパートを借りて暮らし始めました。それも長くは続かず、結局は会社をやめて野宿に戻ってしまいました。その頃に西成のドヤの存在も知って、野宿してでもなんとか生きていけることがわかってきました。それから半年ほど西成で生活をしました。

西成を出て、次に岸和田で古新聞の回収の仕事をするようになります。ここは住み込みで食事つきなのが魅力でした。しかしそこも長くは続かず、今度は堺市の橋の下で野宿を始めます。当時は酒を飲んでブラックアウトして同じ野宿の仲間に迷惑をかけることが多く、その度に寝る場所を変えて暮らしていました。ある時、連れと一緒に生活している時に、最小限の荷物だけもってぷらっとそこを出て、西宮に向かいました。その後すぐに芦屋に向かいましたが、公園の場所も分からず、その時は大変でした。飲み水も見つからず、道に置いてある空き缶にたまった水を飲んだりして過ごし、やっとダイエーの裏に捨ててある残飯を食べることができたのは、10日ほど経ってからでした。それからしばらく西宮と芦屋を行き来して、コンビニの残飯などを拾って食べながら生活しました。

しばらくして、神戸にやってきました。深江浜に

テントを張って生活を始めます。ある時、選挙運動の手伝いをやらないかと声をかけられました。しばらく手伝ったのですが、先方の都合で手伝いの必要がなくなり、切り捨てられてしまいます。怒って選挙運動の会長や専務を呼び出したりもしました。

借金を重ねる

その時は、選挙運動をしないかと声をかけてきた人の家で一緒に暮らしていました。やがて、その人は自分ばかり金を払っていると文句を言うようになりました。そこで、住民票を宮崎から神戸へ移し、サラ金でお金を借りました。最初は3つの金融会社から少しずつ借りていたのですが、ある会社から「50万まで借りられますよ。他の会社のは返して、うちの会社でまとめて借りたほうがいいですよ」と言われました。それで50万借りて、ひとつの会社にはお金を返しましたが、もうひとつの会社にも返すと持ち金がなくなってしまうので、返さずにお金を持って連れのところへ逃げました。

残ったお金で実家に帰ろうと思ったのですが、ふと降りた姫路で飲んでお金を使ってしまう、実家に帰れなくなってしまいました。そのまま20日間ほど姫路のビジネスホテルに泊まって暮らし、お金が尽きると野宿をして、3〜4ヶ月は姫路で暮らしました。ある金融会社には何度も電話し、コレクトコールでお金を借りました。

大怪我をし入院して居宅になるが……

その後また神戸に引き返し、灘区・東灘区辺りをぶらぶらしました。途中でKさんと一緒になり、浜の近くにあるイズズ石油会社のブロックの側で寝るようになりました。しかし、そこも立ち退きの要請が出されて、また場所を変えることになりました。Kさんとは途中で喧嘩をしてしまい、離れることになります。そんな時、大石駅の近くの崖から落ちて怪我（腰椎の骨折・全身の打撲）をしました。赤十字病院に運ばれて入院し、その後S病院に転院しました。退院時に、アパートに住んで生活保護を受けることになりました。しかし、酒をやめることがで

きず、少しして隣の部屋の人に追い出されました。7月に退院して生活保護は9月分までしかもらっておらず、もう一回出してもらえないかと交渉したがだめでした。そこからはしばらく覚えていません。

アルコール依存症と向き合う

次に兵庫区に移り、2号線の高架下で暮らしました。その頃は盗みもしました。また、幻聴幻覚と腰痛がひどく、こむら返りのような状態が続きました。もういちど生活保護を受けたいと思い、巡回相談員に頼んで灘の福祉施設に入れてもらいました。この施設でアルコール依存症であることがわかり、市の職員にアルコール専門クリニックを紹介され、また腰（整形外科）や胃の痛み、皮膚科や呼吸器疾患などは総合病院を紹介してもらいました。ほんとに、ありがたく思っています。アルコール専門クリニックに行きたいが生活保護を受けないと病院にかかれませんか。市の職員に、アルコールをやめることと免許を捨てることを約束して頭を下げ、やっともう一度生活保護を出してもらえることになりました。

2005年8月19日から専門クリニックに通い始めましたが、先生は3年は続けなさいと言われました。その言葉を受け入れ、まず治療プログラムとして、初診者コースから始めました。初診者コースを修了後、新たな治療プログラムとして自助グループに入ることを薦められたので、AA（Alcoholics Anonymous）*のグループに入ることになりました。AAというのは、酒のない人生を送るための自助グループで、1935年にアメリカで発足し、世界各国に広がり、日本には1975年にやってきました。

最初はAAのことなんて全く分かりませんでしたが、1年後にはAAとは何かが少しずつわかってきました。AAのハンドブックには、まず自分をアルコール依存症と認めることが大事であると書かれています。AAのメンバーは、酒のない人生を送るために助け合う仲間なのです。AAではテーマを決めてのミーティングが行われて、自分の体験を話し合います。自分の体験を思い出そうとするのですが、ブラックアウトしている時のことは全く覚えて

おらず、長い時は1週間ほど記憶がない時もあります。その時のことを教えて欲しいのですが、誰も教えてくれません。また、酒を飲んだ時は幻聴や妄想もあったのですが、よく覚えていません。きっと周りに迷惑をかけたと言われた時は、そういったことがあったのだと思います。

飲みたくなると、なんでもしてしまいます。ただ、60歳まで働けば年金で安定した生活が送れるはずだという思いがありました。最後にはもう一度命の大切さと同時に健康の大切さを考え、私は自分がアルコール依存症だと認め、アルコール依存症は進行性の病気であることを忘れずに、仲間とともに今日一日を大切に生きていこうとしています。今は専門クリニックに通いながら、AAの活動に参加して生活をしています。

最後に『アルコホーリクス・アノニマス』の序文を書いておきます。

アルコホーリクス・アノニマスは、経験と力と希望を分かち合って共通する問題を解決し、ほかの人たちもアルコホリズムから回復するように手助けしたいという共同体である。

AAのメンバーになるために必要なことはただ一つ、飲酒をやめたいという願いだけである。会費もないし、料金を払う必要もない。私たちは自分たちの献金だけで自立している。

AAはどのような宗教、宗派、政党、組織、団体にも縛られていない。また、どのような論争や運動にも参加せず、支持も反対もしない。

私たちの本来の目的は、飲まないで生きていくことであり、ほかのアルコホーリクも飲まない生き方を達成するように手助けすることである。（この序文の著作権はA.A.グレイプバイン社にあり、その許可のもとにここに再録された）

※ AA（アルコホーリクス・アノニマス）に関するお問い合わせは以下へ。
AA日本ゼネラル・サービス・オフィス（JSO）
03-3590-5377
AA関西セントラルオフィス（KCO）
06-6536-0828

第4章 座談会・長居公園テント村の強制排除を振り返る



構成・中村 祥規

》座談会参加者

江口 怜 太田有美 中村祥規
鍋谷美子 藤室玲治 村川奈津美
山本かえ子 渡部菜美

●写真 長居公園テント村への行政代執行
に抗議する座談会参加者。スクラム
2列目（2007年2月5日）

はじめに

2007年2月5日、大阪市東住吉区の長居公園で、野宿している人たちが暮らしていたテント群（以下、長居公園テント村）が行政代執行法にもとづき、大阪市によって強制撤去されるという事件がありました。この長居公園テント村には、大阪市に立ち退きを求められた2006年10月時点で16人、代執行当日の時点で7人が生活を送っていました。今回の行政代執行については、2007年8月に長居陸上競技場で世界陸上が開催される前に、大阪市が公園の「美化」を狙ったものではないかとの指摘が強くあります。

長居公園テント村は、大阪市によるシェルター設置を受けて2000年8月に発足した「長居公園仲間の会」によって、長年、自治的な運営が行われてきました。また、近郊の休耕地での農作業や、毎年1度行われてきた「長居公園大輪まつり」などのイベントを通じて、テント村に集まる若者や地域社会との交流が図られてきました。夜回り準備会メンバーの鍋谷がこうした活動に数年来関わってきたこともあり、今回の代執行にあたっては、夜回り準備会の私たちが抗議行動に加わることになりました。

当日の抗議行動は、テント村の住人やその知人が、それぞれの思いを込めて演じた芝居を中心に展開されるという、メッセージ性の強いものでした。その中で、鍋谷は芝居の役者として、そのほかのメンバーは芝居が行われた舞台を取り囲むスクラムに入ると

いう形で、現場を経験しました。

そこでこの第4章では、長居公園テント村での行政代執行に対しての抗議行動に参加した当会メンバーらによる座談会を企画しました（2007年7月30日）。座談会には、当会の活動に定期的に携わっている、中村祥規・鍋谷美子・藤室玲治・村川奈津美・山本かえ子に加え、神戸大学学生震災救援隊を通じて当会と関わりの深い、江口怜・太田有美・渡部菜美の計8名が参加しています。代執行当日の経験には、参加者それぞれが強い印象、衝撃を受けていて、それぞれが感じたことを語り合った結果、座談会は約7時間にも及びました。本章でご紹介できるのはその一部ではありますが、私たちが代執行の現場で気づいたこと、考えたことの一部がお伝えできればと思います。

なお、今回の長居公園テント村での行政代執行に対する抗議行動については、その参加者などにより記録集『それでもつながりはつづく』（ビレッジプレス、2007年10月）が作成されています。長居公園テント村の歴史と代執行にいたる経緯についての解説、当日上演された芝居の台本、参加者の手記などが収録されています。今回の座談会参加者のうち、江口・中村・鍋谷・藤室・山本の5名も寄稿していますので、よろしければ合わせてお読み下さい。

（なかむら よしのり）

神戸に住んでいる私たちが、なぜ大阪・長居公園のテント村に心を寄せたのか

鍋谷：今回は、2007年2月5日に長居公園であった行政代執行に、何らかの形で関わった神戸のメンバーということで集まってもらいました。長居公園の代執行について、あれは何だったのか、神戸に住んでいる私たちがなぜあの場に心を寄せたのか、話し合っていく中で考えを深めていけばいいと思います。

あたしの話から始めると、長居のテント村に関わり始めたのは2004年の春でした。神戸YWCA夜回り準備会（以下「Y」）の夜回りに行き始めたのとはほとんど同じころやったかな。野宿のこと全般に関心を持つようになった時期だった。長居のテント村には、Yの夜回りから参加していたというよりも、鍋谷個人としてそれぞれに参加してたという感じで、今に至っている。代執行当日は、芝居に出演するという形で抗議行動に参加していました。

山本：Yの夜回りに参加して4年くらいになります。長居公園のテント村は、鍋谷さんが——友だちが行っているところという感じで、私自身が実際に足を運んだのは2回くらいしかなかったと思う。

代執行の当日、長居に行こうと思ったのは、その1年前にあった鞠（うつぼ）公園^{※1}の代執行のことが頭にありました。私はその日、抗議行動には参加してなかったんだけど、公園に住んでいた友人のYさんがそこで逮捕されてしまって。用事があるのを言い訳にして現場に行けなかったことに後悔があって、長居公園とは直接の関わりはほとんどなかったけど、今回は参加しようと思った。

藤室：僕はYでの夜回りは2004年くらいから参加しているんだけど、大阪方面とはあまり関わりがなかった。2006年1月の鞠公園の代執行のことも、去年の活動報告書を作るときに鍋谷さんの手記^{※2}を読んで、事後的に知ったのがほとんどだった。

参加者紹介

江口 怜（えぐち さとし） 1987年生まれ。神戸大学2回生、学生震災救援隊。藤室の呼びかけに応じて抗議行動に参加した。

太田 有美（おおた ゆみ） 1985年生まれ。神戸大学4回生、学生震災救援隊。当日の抗議行動には参加できなかったが、1月21日のプチ大輪まつりでテント村を訪れた。

中村 祥規（なかむら よしのり） 1979年生まれ。大阪大学大学院。2007年1月から当会の活動に参加している。

鍋谷 美子（なべたに よしこ） 1981年生まれ。夜回り準備会共同代表（2005年度～）。長居公園テント村にも数年来の関わりを持つ。代執行に対する抗議行動にあたっては、芝居の役者として参加していた。

藤室 玲治（ふじむろ れいじ） 1974年生まれ。神戸大学大学院、学生震災救援隊。2004年から当会の活動に参加。救援隊の学生などに、抗議行動への参加を呼びかけた。

村川 奈津美（むらかわ なつみ） 1985年生まれ。夜回り準備会共同代表（2006年度～）。神戸大学4回生、学生震災救援隊。2004年から当会の活動に参加。

山本 かえ子（やまもと かえこ） 1980年生まれ。神戸YWCA職員、神戸大学大学院。2003年から当会の活動に参加。2004～2005年度共同代表。

渡部 菜美（わたなべ なみ） 1986年生まれ。神戸大学3回生。2005年・06年に同大のボランティア講座で夜回りに参加した。

（肩書等は2007年12月現在）

鍋谷さんのレポートを読んだ時、不思議だったのは「どうしてこんな敗北必至の籠城戦をするのか」ということだった。粘れば何か取り引きできるわけでもないし、ああいう形で抵抗して当事者はいったい何が得られるのか不思議だった。

10月26日に大阪の玉造で「長居公園大輪まつり^{※3}」の記録映像の上映会があって、そのときに実際にテント村の人と知り合うことになった。上映会が終わっ

※1 大阪市西区にある公園。2006年1月30日、大阪市による行政代執行で、野宿している人たちのテント群が強制撤去された。

※2 鍋谷美子「2006年1月30日・うつぼにて」神戸YWCA夜回り準備会編『2005年度年間活動報告書』（2006年12月）。

※3 2004年から毎年1度、「長居公園仲間の会」が開催してい

るお祭り。野宿している人と若者、地域住民など誰でも楽しめるような交流の祭りを目指し、模擬店出店やステージでのバンド演奏などが行われる。代執行によりテント村が強制排除された後の2007年10月13～14日にも、長居公園で開催された。

た後、そのままテント村で一泊することになって、テント村に住んでいるSさんと話をすることができた。そこでいろいろ話を聞いていると、たたかうことの意味がだんだんと腑に落ちてきて。その頃から、代執行があった時には救援隊^{※4}のみんなでぜひ守りに行きたいと思うようになった。それからは、映画『関西公園〜Public Blue〜^{※5}』の上映会を企画したり、鍋谷さんの手記の抜刷を配ったりして、みんなに興味を持ってもらおうとしていた。

中村：僕の場合、野宿関係の活動に参加するようになってから、とても日が浅い。Yの夜回りに初めて参加したのも今年1月の最初の回で、そのころには長居公園の代執行はすでに決定していた。1月21日のプチ大輪まつりで初めてテント村に行って、こういうところがあるのかと驚いた。前にいた大学は学生運動がけっこう残っているところで、何かあるたびに大学と関係のない人が大勢やってきて、座り込みとかデモとかやるのに違和感があったんだけど、長居はそれとは感じが違って、それが印象に残った。

自分自身は、野宿している人の問題について何ができるかずっと気になっていた。現場に行けば、何ができるんちゃうかと思った

村川：神戸での夜回りは、大学に入学した2004年の春から続けてきたけど、大阪とか長居公園とはあまり関わりはなかった。Yで企画した連続講演会^{※6}で中桐さん^{※7}の話を聞いたこともあったけど、そのときもそれっきりだったし。ただ、機会があれば行き

たいという気持ちはずっとくすぶっていて、Yの夜回りの後、みんなでごはんを食べに行ったり、たまたまそんな話をしたら、鍋谷さんに「大みそかにお祭りをするよ」って誘ってもらった。それが長居公園に行くことになった最初のきっかけでした。それでそのまま2007年の新年をテント村で迎えることになって、そうすると、テント村に愛着が少し湧くようになってきた。

太田：私の場合、関わりというほどの関わりもなく。プチ大輪まつりには行かせてもらったんですけど、代執行の当日は都合が付かずに行けなくて。代執行の当日は、テレビで様子を見ていました。ただ、代執行はすごく腑に落ちないできごとで、ずっと引っかかりが残っています。

渡部：野宿している人のことに関わることになったきっかけは、1回生だった2005年の冬、灘チャレンジ^{※8}2006の準備をしてたときでした。灘チャに関わるいろんな人の話を聞こうということで、野々村さん^{※9}の話を聞きに行きました。その後、2005年度の神戸大学ボランティア講座^{※10}の実習で、神戸YWCAの夜回りに参加させてもらったりもしたんですけど「お客さんやったなぁ」という感じで。2006年度のボランティア講座では、野宿者支援分野の窓口を自分が担当することになったこともあって、そういう自分自身は、野宿している人の問題について何ができるんやろうとずっと気になっていた。ちょうどそんなときに、長居公園の代執行の話が藤室さんからメーリングリストに流れてきて。「長居公園に行っ

※4 神戸大学学生震災救援隊。神戸大学の学生サークル。阪神・淡路大震災時の救援活動に端を発し、さまざまなボランティア活動・地域活動を行なっている。座談会の参加者では、村川・太田・江口・藤室の4名が所属。行政代執行の直前に、藤室が救援隊のメーリングリストなどを通じて抗議行動への参加を呼びかけ、江口ほか数名が応じた。

※5 大阪の公園のテント村で暮らす人々や支援者のインタビューから構成されるドキュメンタリー映画。朝公園・大阪城公園の強制撤去の様子も収録されている。監督はアンケ・ハールマン。日本・ドイツ、2007年、70分。

※6 2004年7月から11月にかけて神戸YWCA 夜回り準備会が主催した連続4回の講演会。中桐さんは10月2日に講演してくれた。

※7 中桐康介さん。長居公園仲間の会。2002年から長居公園のテント村で自ら生活し、テント村を守る活動を続けてきた。

また非正規労働者のための労働組合などの活動にも参画している。

※8 震災復興を祈念して始められた、学生・地域団体の協働によるお祭り。通称・灘チャ。毎年6月に神戸市灘区の都賀川公園で開催される。神戸大生が運営の中核を担っていて、渡部は2006年度に実行委員会副委員長、2007年度は委員長を務めた。

※9 野々村耀。夜回り準備会、最古参のメンバーのひとり。1980年代に横浜で野宿の問題に関わり始める。1995年の阪神・淡路大震災後に神戸に来て、1997年の夜回り準備会設立に関わる。

※10 神戸大学の主催で、毎年2〜3月に実施されている講座。夜回り準備会も現場実習の受け入れ団体の一つとなっている。運営は学生ボランティアが行なっていて、渡部は2006年度の神戸大側担当者。

てみんなでテント村を守るぞ！」と。そういう現場に行けば、自分も何かできるんじゃないかと思った。

江口：（野宿のことは）去年、大学に入るまで考えたこともない問題だった。村川さんに誘われて1度だけYの夜回りに参加させてもらったけど、それでようやくゼロが1になったという感じで、それ以降は特に続けて参加していたわけでもなかったし。12月ごろには代執行の反対署名の用紙を見せてもらったりして少しずつ情報は入ってたけど、そのころはまだ全然ピンと来てなかった。問題意識もたいしてなかったと思います。

少しずつ問題意識を持てるようになってきたのは、鍋谷さんの靱公園の手記を読んだころから。あれは大きかった。もっとも、その時は寝る前にたまたま近くにあったから手に取った、くらいのものだったんですけど（一同：笑）。藤室さんからのメールが流れたのは、ちょうどそれくらいのころでした。ふだん野宿の問題にかかわっているわけでもない自分みたいなのが、好奇心で行っていいのかなという抵抗はあったんですけど、最終的に行こうと思ったのは、藤室さんのメールに「劇を守りに行こう」という言葉があったから。僕も高校時代に少し演劇やっていたこともあって、「そこで劇やるんかよ!？」というのがまず驚きだったし、何をするのか、何を表現したいのか、自分も見たいし、それを守りたいと思いました。

社会から排除されているはずの人が「この世界を愛してるんだ」と言っていたのがすごく衝撃的だった

鍋谷：ここまで、テント村に行こうと思ったきっかけについて話してもらったんですけど、実際に行ってみた印象はどうだった？

江口：テント村に着いたのは、前日の午後9時ごろでした。たくさんの人がいて、誰が誰だか分からない状態で。テント村に住んではる人に怒られたんですよね。ゴミ箱の上で書類^{※11}を書いていたら、「お前らそこで何してんねん。邪魔になるやないか」と。藤室さんが「鍋谷さんの知り合いで」って説明してくれたからよかったんですけど。ただ、顔も見たこ

とがないやつが来て怪しまれるのは、もっともやなとも思いました。

村川：私が長居公園に着いたのも、江口くんとほぼ同じくらいの時刻でした。夜はやっぱりすごく寒かったですね。もともと体力ないほうだから、できるだけ体力温存しよう、眠れたら眠ろうと思ってたんですけど、やっぱり眠れなかったです。

渡部：私が公園に到着したのは、前日入りした神戸大組では一番遅かったと思います。バイトが終わった後だったんで、終電に近いくらいの電車でした。

前日から当日にかけては、最初から最後まで居場所がないって感じでした。はじめて行く場所やったし、正直、誰がテント村に住んでいる人で、支援者で、マスコミなのかも分からない状態でした。分かるのは、神戸大生と、神戸YWCAの夜回りの人と、後は指揮を執っている人くらいで。夜はとにかく寒くて、凍えは家に帰って風呂に入るまで取れなかったです。こういう中でずっと生活するのは、やっぱりキツイよなとも思いました。

太田：代執行の当日には行けなかったのが、プチ大輪まつりのときのことが、あたしにとっての長居公園のテント村の印象になります。そのときはお祭りやったから、ピリピリしてたわけじゃなかったです。祭りのときも芝居の上演があったんですけど、あたしは、その中の「愛してるよ」という台詞にやられてしまった。普通に考えたら、野宿してる人って社会から排除されてしまっただけで「くそー」と思ってるはずやと思うんですけど、そういう人が「この世界を愛してるんだ」と言っていたのがすごく衝撃的だった。なんでそんなことが言えるんやろうというのが本当に不思議だった。

その日の夜、カレーとかも食べさせてもらって。あたしは知らない人に囲まれると気後れしちゃうほうなんですけど、そのときは、歓迎されてるわけじゃないけど排除するわけでもないという雰囲気があって、それがすごく心地がよかった。知らない人どうしなのに、輪になってふつうに食事できるのが居心地よかったですね。

※11 万が一逮捕された場合に備えて、家族・職場・学校などの緊急連絡先や伝言などを記した用紙。スクラム参加者には、この用紙の提出が推奨されていた。

ガードマンの人も芝居を見ているのが分かって、それを見ていると「ああ、感情が動いてるな」と。そこに可能性を感じた

渡部：早朝の最後のミーティングでは、全国から集まった人が「たたかうぞ」って演説してて、「カゲキな感じかもしれない」と思ったりもしました。でも、藤室さんは「芝居を守る」って言ってたし、大丈夫やろうと。

山本：信頼されてるなあ、藤室さん（笑）。

渡部：スクラム組んでたときは、8時か9時くらいに始まるって聞いてたのになかなか始まらないから、「まだなん、まだなん？ 行政って時間にちゃんとしとんやないん？」という感じで待ってました（一同：笑）。そうこうしているうちに、軍隊みたいにズラッと整列して、「うわあ、いよいよ来たなあ」と。

劇の内容はあまり覚えていないけど、面白かった。直接行政を批判しているわけじゃないけど、「愛してる」とか、言いたいことが出ている感じ。

江口：代執行のときは感覚がマヒしていたけど、後から考えると怖かったなと思います。特に感情があるわけでもないのに涙が止まらなくて、ヘンな感じでした。芝居は面白かったです。ちょうど舞台のそばだったんで、後ろをチラチラ振り返りながらずっと芝居を見ていました。ガードマンの人も芝居を見ているのが分かって、それを見ていると「ああ、感情が動いてるな」と思いました。そういうのに可能性を感じました。

鍋谷：当日、あの場にいた人でも、芝居を見れた人と見れなかった人がいて、それによってもあの日の印象が違うんだよね。舞台袖のすぐ下にいた人は役者の動きが全然見えなかったり、外にいた人は拡声機の声で何をしゃべっているのかが分からなかったりして。

藤室：僕らは舞台正面のすぐ下に陣取っていて、芝居の様子はすごくよく分かるところだったんだわ。その分、報道のカメラマンにもバシバシ撮られてたけど。

江口：ホントにもったいなかったですね。みんなに聞かせたかったのに。

鍋谷：太田さんは、当日はテレビを見てたの？

太田：お昼ちょっと前から出かけたんですけど、午前中は生中継でやっていたのを見てました。舞台も、画面の奥のほうに映っているのが見えました。でも、テレビのレポーターの人は、舞台のこととか芝居のこととか、何も言わないんですよ。あそこで芝居をやってるなんて、ぜったい違和感があるはずなのに。私は芝居を見たことがあるし、みんなはそれを守るために行ってるって聞いてたから、「どうか、この芝居がその場にいる人に何かを残してくれれば」と思いながら見てました。でも、自分は何もできなくて、すごく歯がゆかった。

国とか行政に正面から抗議したことなんてなかったし、戸惑いもあった

渡部：隣にいた京大かどこかの学生らしい人はすごく気合が入ってて、シュプレヒコールとかもすごく大きな声をあげてたんだけど、うちはそこまで言えなくて。小中高と今まで従って生きてきたほうだったし、国とか行政とかに正面から抗議したこともなかったし、戸惑いもあった。声は出さなかったというか、出せなかったというか。やっぱり怖かった。はたから見てたら、国とかのほうが正義でうちのほうがダメなことをしてると思われてるのかもしれないし、罪悪感もありました。それまで長居公園にかかわりがあったわけじゃないし、思い入れがなかったぶん、そういう気持ちが先に出ちゃったのかも。

同じ歳くらいの若い女の子が拡声機で「のいてください」って叫んでたんだけど、言わないといけないから言わされてるんかもしれないと思ったりもしました。ガードマンをしている人たちも、その日限りの日雇いっばい人で、野宿している人と紙一重みたいな感じの人が多かった。

鍋谷：しんどくなって途中でスクラムから外れたと聞いてたから、すごく心配してたんですけど……。

渡部：精神的にというよりは、体力的にムリかなという感じで、最後は外に出ました。最初は、劇を1

回やったら終わると思ってたんですけど、もう1回始まって、「これ、繰り返しやるんや」というのが分かると、いつ終わるか分からないというのに耐えられなくなってしまった。バリケードを出た時は、正直、ちょっとほっとしたのも確かでした。

鍋谷：芝居やってるほうは、気持ちが張ってるからそうでもないと思うんやけど、ずっと座ってるだけの人とかはしんどかったと思う。特に芝居見れなかった人とか。そういう意味では、ずっと立ってるガードマンとかもしんどいやらなあ。

違う出会い方をしていたら、友だちになっていたかもしれない人と対峙してることに気づいた

村川：私の場合は、向かってくる行政の人たちと対峙することに集中しようとしてました。で、シュプレヒコールが上がったりして、現場がすごく緊迫してきたときなんですけど、突然、何かブツッと切れたんですよ。1回目の芝居が終わったくらいのことだと思うんですけど、そのときは、ひたすらギャーギャーわめいてました。そのうちパンが上から落ちてきて、隣にいた中村さんが「あんた、とりあえず食べ」と勧めてくれて、それで少し落ち着いたんですけど。パン、涙声で食べてました。

鍋谷：ごはん、大事ななあ（しみじみ）。

村川：渡部さんも言ってたけど、向かってくる行政の人に同い歳くらいの子がいることに気づいたんですよ。友だちに似てる子も普通にいて、違う出会い方をしていたら、学校で友だちになっていたかもしれない人と対峙してることに気がついて、「あれっ？」と思った。こうやって、お互い対峙させられてることじたいがバカバカしくなったというか、本当に「うちら、こんなとこで何してるんやろ？」「もう、みんな帰ればいいやん」「あったかいストーブのある家におればいいやん」と思えてきて、そんなことをずっと叫んでいた。今思えば、あそこで何かが壊れたんでしょうね、きっと。

中村：誰かに向かって叫んでるというよりは、独り言をものすごく大きな声で怒鳴ってるみたいな雰囲気だった。

鍋谷：たぶん、靉公園のときのあたしがそんな感じだったと思う。団結小屋とは別のところで動いていて、各自が自分で思ったことを叫ぶしかないという感じで。テントが壊されてるのを見ながら、そうするしかなくて、泣きながら叫んでた。

村川：もともとは、ひとが住んでいるところを代執行するなんておかしいというのがあって、その理不尽さに立ち向かわないといけなと思ってたんですよ。だけど、実際に行ってみて、向こうも排除しなくて排除しに来てるわけじゃないよな、ということに気がついて。向こうも仕事だから仕方なしにやってるだけだし、こっちもイヤな思い、怖い思いしているだけで、お互い気が向かないことならやめればいいのに、何でこんなことが起こるんだろうというのが、理不尽だった。

「抗議する人もいるんだよ」ということを、市の職員や世間の多くの人にも知ってもらおうというのが、自分にもできること

藤室：僕らがスクラムを組んでも、行政がテントを撤去するのを数時間遅らせるのが精いっぱいではない。そういう行動にどんな意味があるんだろう？僕自身、呼びかけておいてこんなこと言うのもなんだけど、多くの人が呼び掛けに応じてくれたのは、うれしかった反面、ちょっと驚きでもあった。

渡部：「抗議する人もいるんだよ」ということを、市の職員や世間の多くの人にも知ってもらおうというのが、自分にもできることかなと思った。ただ、職員の人たちには伝わったかもしれないけど、全然報道されてなかったし、テレビ・新聞を見ただけの人には伝わってないんでしょうね。バリケードの向こうにいた人たちも、うちのことを見てどう思ったのかな。でも、行政の人には届いたかなと思います。

藤室：芝居がなくてもスクラムには参加した？

渡部：ひょっとしたらスクラムには参加しなかったかも知れない。長居公園には行ったかもしれないけど、スクラムには入らなかったかも。芝居を守るというのは、私にとっては分かりやすかったです。人とかテントを守るというのが目標だと行政と真正面

からたたかうという感じになってしまうけど、芝居を守るというのだとちょっと穏やかな感じがして、そのぶん入りやすかった。

藤室：江口くんは以前「芝居がなかったらたぶん行かなかったと思う」って言ってたけど、やっぱり芝居の存在は大きかった？

江口：そうですね。僕の場合、芝居がなかったら参加してなかったと思います。日常的に野宿の問題と関わっているわけではないし、ただの物見遊山のようにして行くのには抵抗もあったし。スクラムの中に入ることにについては「芝居を守りに行く」という目的で行ったから、芝居を守らないと意味がないという気持ちはありました。

鍋谷：芝居があるからそれを守りに来てくれたというのは、狙いどおりって感じやね。「代執行やから守りに来てくれ」というより、「芝居やってるから見に来ない？」のほうが誘いやすいよなという話を、芝居を作った子と2人でしてたんだよね。あたしとその子の2人だけでの話やから、芝居のメンバー全員で共有していたわけじゃないけど。

村川：私にとっては、芝居を守るかどうかというのは、そんなに大きくなかったと思う。ひとが住んでるところを代執行で取り壊すというのはおかしい、というのがもともとの考えやったし、芝居があるかどうかはあんまり関係なかった。

私が行くかどうか悩んでいたのは、長居のテント村の人たちとはほとんど関わりがないのに、自分が行っても迷惑な人と違うかなということ。神戸でふだん、私たちが夜回りしている人たちの小屋やテントだったら、まっさきに向かったと思う。だから、藤室さんのメールを最初に見たときは、「藤室さん、これ、正気？」って感じでした（一同：笑）。あれを見て「長居公園とは何の関わりのない救援隊のメンバーにこれだけ呼びかけてるんやったら、私もそんなに悩まなくてもいいんかな」と思えるようになったのも、確かなんですけど。

藤室：支援者は多いに越したことはないと思っていた。あと、芝居を見る機会は二度とないから、それをぜひ救援隊のみんなに見せたいという気持ち、一

度とにかくあのテント村を見てほしいという気持ちは、確かにあった。阪神・淡路大震災当時の救援隊は、避難所を離れてテント村で避難生活をしている人たちの訪問活動を中心にしてたんだけど、そもものきっかけは、東京で野宿者の支援活動をしている人と合流したのがきっかけだった。その人から、「避難所には物資も情報も集まるけど、テントで生活している人たちはほったらかしにされて、きっと大変だろう」というアドバイスを受けて、そこで、救援隊の活動の方向性がはっきりした。『関西公園～Public Blue～』の上映会を企画するときには、そんな話をした。

テント村で生活してきた人たちの間で、一定の合意が共有されているということが実感できた

藤室：ただ、芝居があったから呼びかけやすかったのは確かだったね。テント村の住人が芝居を本当にしたいのか、最初はちょっと疑問なところもあったんだけど。ただ、1月21日のプチ大輪まつりのとき、テント村の住人と支援者との間で口論になる場面があって、Sさんがそこで、「おれたちは芝居をやるんだから、支援は黙ってそれを守れ」と言ってるのを聞いて合点がいった。あそこで、当事者たちが自分たちの意思で芝居をやるというのがよく分かった。鍋谷：最初、芝居をやりたいと言ったのは、テント村住人のSさんとOさんだった。テント場がなくなる前に、何かみんなでやりたいという気持ちが強かったんだと思う。それで、とりあえず大みそかの餅つきを目指してやろうか、って感じで始まって。そこに、自分もやりたいという人が集まってきて、結局10人くらいになった。

練習している間も、何で芝居やるのかっていうのはいろいろ話したんやけど、当事者が言いたいことを言えるように、というのが中心目標だったと思う。表現のしかたとしての芝居の位置づけは、人それぞれ違ったかもしれないけど。テントを守るという形の抵抗をしていますが、言いたいことが伝わらない、聞いてさえもらえない、という気持ちが強くて、だったらそれを表現しよう……という流れになった

んかな。あくまで、あたしの認識やけど。

藤室：Sさんと話をしたときに感じたんだけど、長居公園には「テント村とそこに出入りする人たち」という、ひとつのコミュニティができあがってたのかなと思う。ひとくちに「当事者に寄り添う」って言うけど、僕が話をしたことのある人たちについて言えば、生半可に「寄り添える」という感じじゃない。プチ大輪まつりのとき、「芝居をするという一点だけで合意している」ってSさんは言ってたけど、あの個性的な人たちがその一点で合意できたというのがすごいと思う。

中村：テント村に住んでいるSさんの口から、「自分たちは芝居がやりたい。だからそれを守ってほしい」という言葉が出たのが大きかったと思う。そこにOさんが同調して。あの一件で、テント村で生活してきた人たちの間で、一定の合意が共有されているということが実感できた。僕らみたいによそから来た人間にとっては、自分が行こうとしている動機が、もともとテント村にいる人たちの動機と接点があるのかどうかすごく気になるところ。接点がないところに行っても、その人たちとは何の関係もない、自分の個人的な問題意識をぶちまけるだけになってしまうし。でも、21日の一件があって、その点がストンと腑に落ちた。芝居を守ることじたいが魅力的だったということもあるけど、芝居をやるということが、もともといた人たちの中から出て来たんやなということがあのやり取りでわかって、それで行きやすくなったんかなと思う。「ここ来てるけど、ほんととは場違いなところに来てるんやないかな」みたいな心配はしなくてよかったし、そういう意味では、安心感があった。

藤室：「芝居をするという一点だけの合意」というのは言い得て妙で、住んでる人たちだけでなく、芝居を守ろうとして来た人にも同じことが言えたんじゃないかと思う。「芝居をするから静かにしてくれ」という要請もそうで、そういう合意に同意できない人は、みんな最初から外にいたわ。

鍋谷：当日のこともそうだけど、代執行を迎えるまでの緊張状態の中で、共通の目標があったから何と

か辛うじてまとまっていたという意味でも、芝居の存在は大きかったと思う。芝居が原因でけんかもしたし、途中で抜けた人もいたけど、でもやめって話にはならなかった。ストレスも強かったけど、芝居があったおかげでひとつのことに集中できた。はけ口のような役割があった。

藤室：僕らが行くという意味でも、芝居の力は大きかったよね。錦の御旗というか、大義名分としての芝居を守るという目標が機能していた。

鍋谷：誰が何を守ろうとしているのかはホントにグチャグチャで、そういう中で、行動の点でみんなを納得させる力が芝居にはあったと思う。運動のやりかたとしてはかなり批判もあったけど、「やりたいんならしゃあないか」みたいな落としどころにはなっていたんじゃないか。

しんどくさせられているほうが声を上げないといけない状況が、すでにしんどいと思う

鍋谷：なぜ神戸の私たちが長居公園に行ったのかというのが、根源的な問いやと思うんやけど。

藤室：今回の活動報告書にこの座談会を入れるかどうかについて、僕らの間でも少し意見が分かれたんだよね。

太田：ふだんの活動とのつながりを見いだせないってことですか？

藤室：活動地域の問題というのももちろんあるけど、それだけではないと思う。自分たちの地元である神戸では追い立てに対峙できていないのに、大阪の運動の応援に行ったことを大きく取り上げることに対する疑問かな。

中村：足もとで起きている問題にちゃんと行動できていないのに、ってことやと思う。

鍋谷：あたしはそこのところで、神戸にけっこう負い目がある。大阪のほうが濃くて面白くて、そっちにばかり行ってるけど、神戸の実際のことはあまりできてないなという気持ちが、ずっとくすぶっている。「イヤやねん」すら言えない神戸の人にとって、うちらが頼れる存在やったら、助けてほしいって声が出てくるかもしれないのに、実際は、追い立

てに遭ったあとになってから、「しょうがないから出て行くわ」って話を聞くだけやったりするし。大阪と神戸、事情が違うとは思うんやけどね。

藤室：大阪でもテント村以外のところでは、神戸と似たようなものだと思う。釜ヶ崎でもプランターを並べて寝られないようにしてるし。日々、ミクロな追い立てがどんどん起きている。

鍋谷：追い立てとたたかうといっても、こちらから提案するとなると、それを支えることの責任もあるし、そんなに簡単にできない。たたかうってしんどいし、生活もあるし。「泣き寝入りせずに裁判しよう」というのと同じようなものだと思う。そのほうが理想的ではあるんだろうけど、たたかうというのは、やっぱりそれじたいがしんどい。

生活保護を受けたいという人には、敷金なしで受け入れてくれる知り合いの大家さんを紹介したりして、保護申請の手伝いをしたほうが、その人の生活にとってはいいだろうとも思うし。ある意味骨抜きにされているのかもしれないけど、生きていくためには仕方のないことだったりもする。大阪で活動してる人たちも、別にシェルター^{※12}に入ったり、生活保護を受けたりすることに反対してるわけじゃないしね。ただ、それでも、イヤなことをキチンと「イヤ」と言える場は大事で、そのバランスというか、矛盾の中でやっていくしかないのかなと思う。本当は、しんどくさせられているほうが声を上げないといけない状況が、すでにしんどいんやと思うけど。

基本的な権利意識が低いと、踏みとどまってやろうということにはならない

藤室：神戸の、僕らがふだん訪問しているようなところで野宿している人の感覚だと、住んではいけないところに住んでいるというのがあるんだと思う。

だから、襲撃や工事があったりすると、自分から進んでいなくなってしまうし、みんななるべく見えないように隠れて暮らしている。一方、長居公園テント村の人たちはというと、好きで公園に住んでるわけじゃないとはいうものの、だからといって一方的に「出て行け」と言われると、「それはおかしい」という感覚はある。そういう感覚がなければ、「代執行に抵抗する」なんてできない。

中村：当事者のニーズが形として見えないと、まわりの人間は動けないのかな。プチ大輪まつりのときの非暴力についてのやりとりも、当事者のニーズが出た瞬間だったと思うし、救援隊が中越とか能登の被災地でやっている足湯^{※13}とかもそうだし。ニーズが言えるだけの環境や人間関係が、長居公園や足湯の現場にはあるのかなと思う。

鍋谷：ニーズが言えるような人間関係を作ることが支援に繋がるってことか。

中村：反対に、僕らがふだん夜回りしている中では、そういう人間関係を十分に構築できていないのかもしれない。

山本：何がニーズかって対話の中で出てくるものじゃないかな。「何かしてほしいことありますか」っていきなり聞かれても、答えられない。

藤室：ただ、当事者と支援者の権利意識が低いと「このくらいでいいか」となってしまう。基本的な権利意識が低いと、踏みとどまってやろうということにはならない。もちろん信頼関係は大切なんだけど。

もう少し怒（おこ）れるようになりたい

鍋谷：野宿してる人やったら、屋根があったら十分やん、シェルターでいいやんというのと一緒やね。

※12 野宿している人を対象とした一時宿泊施設。大阪では、1泊だけの緊急夜間宿泊シェルターと、公園内のテント生活者をおもな対象とした公園型シェルターがある。緊急シェルターは、2段ベッドを並べた、ただ寝るためだけのもの。公園型シェルターは、長期滞在でき、簡単な食事が出るところもあるが、当該公園が周辺のテント生活者しか受け入れなかったり、仕事のためのスペースがとれなかったりするなど、実

際の利用には制限が多い。大阪では現在、シェルターを期限付きで建てては、必ずしも全員が「自立」できないまま閉鎖する、ということが行なわれている。

※13 救援隊（※4参照）が、震災被災地の中越や能登などで行なっている活動。避難所を訪ね、避難生活を行なっている被災者に足湯を行ないながら話をする。その会話の中でふとつぶやかれる言葉から、被災者のニーズを拾っている。

シェルターに入るのがあかんというんやなくて、そこでの扱いが、どれだけひどいものかということをしかり言うていくことが、権利意識としてすごく重要やなと思う。もちろん、生きていくためにはシェルターみたいなところも利用していかないといけない、というのも一方ではあるんやけど。そこのところをたたかっていくのはしんどいけど、すごく必要なこと、大切なことやと思う。長居公園のテント村は辛うじてそれを両立していたのかなと思うけど、そういうところは大阪でも少ない。野宿している人が、自分も言いたいこと言ってええんやと思えるようになれば、声も上げられると思う。神戸でも、「自分が悪いからこうなんねん」「おれみたいになったらあかんで」みたいなことを言う人がいる。そうやないねん、ということをしかり言うていかないといけない。

山本：2004年に開催した連続講演会で、講師の中桐康介さんが最後に「ビバ野宿」という話をしてくれたのを思い出す。「野宿したってええやん」「テント村作ったってええやん」、そう思えるようになれば、そこから「野宿している自分たちにも生きていく権利がある」という気持ちが生まれるのかも。「こうなったんはおれのせいや」って言う人は、野宿している状態についてすごく否定的で、「自分はここにいてはいけない」という感覚がある。そういう人は、追い立てを受けるとすっといなくなってしまう。一緒に暮らしている仲間がいるかどうか、きっと大きいんやろな。あたしたちが訪問している灘・東灘では集団で住んでる人がほとんどいない。少し前まではちょこちょこはいたけど、それでも5～6人くらいの規模やったし。

藤室：みんなで住んでるというのが大きいんやろな。

鍋谷：それ、ぜったい大きい。コミュニケーションをとる人がいるだけで全然違う。ひとりでいるとコミュニケーション能力がどうしても落ちてしまう。コミュニケーション能力が落ちて、言いたいことが伝えられなくなってしまうと、「誰にも分かってもらえない」「認知してもらえない」という気持ちが強くなる。代執行のとき、芝居に参加してたSさ

んだって、テント村に来てすぐはほとんど会話もなくて、話をするようになるまでけっこう時間がかかった。

藤室：そういう人が、今回の代執行みたいなときには権利主体になる。権利意識って自分ひとりだけでは維持できないんだろうね。

鍋谷：逮捕されて拷問されてる状態なんて、まさにそうやと思う。自分ひとりで自分を信じて主張できるほど、人間って強くない。あたし自身、野宿のことに関わり始めてから、自分の権利意識って上がったと思うし。「ああ、これ言ってもいいんや」とか、「ああ、こんなに自分って虐げられてたんや」とか。もともと権利意識低かったんやと思う。今日、いろいろ分かったなあ。

藤室：追い立てられることに対しての怒りが必要なんだと思う。怒りがないと行動できない。都賀川の追い立て^{*14}にしても、時間がたってからようやく腹が立つようになってきたんだけど、それでは遅いんだと思う。もちろん、当事者抜きで僕たちだけ怒っててもしょうがないんだけど、何というか、もう少し怒（おこ）れるようになりたいよね。

※14 本書第2章13ページ参照

第5章 参加者の感想



今西裕哉 江口 怜 岡本建志 岸 洋平
堺田 愛 砂脇 恵 武久真大 中村祥規
中山 茂 鍋谷美子 野々村耀 檜垣智子
藤室玲治 松本光代 村川奈津美
山本かえ子 頼政良太

●写真 灘チャレンジでの模擬店出店後、
夜回り準備会メンバーで撮影（2007
年6月3日）

変わった意識

今西 裕哉

夜回り活動に参加してきて野宿生活者や社会全体を見る目が大きく変わったと思います。活動に参加する以前は、野宿生活者のことを「汚い」「危ない」といった先入観やマスコミの報道などによるマイナスイメージから来る偏見を持っていました。しかし、活動の中で動物を大切に育てている人、親しく声をかけてくれる人などいろんな人と出会い、交流することができたことで野宿生活者ということの偏見を薄めることができ、以前に持っていった「ホームレスの人々は自分とは違う世界の人である」といったふうな考えを改めることが出来ました。また、野宿をせざるを得ない今の社会の仕組みについて疑問を持つこともでき、野宿生活者に関することだけでなく幅広く興味を持てるようになりました。

今日まで参加してきた夜回り活動では、本当に多くのことを学ぶことが出来たと思います。自分ひとりの力は微力けれども、出来る限りこの野宿者問題について考え、活動に参加し、この弱者に冷たい社会を変えていくためにもがんばっていきたく思います。

（いまにし ひろや）

聞き取りから見えたもの

江口 怜

最初に述べておくと、僕は夜回り準備会の日常活動に参加したことはたった一度しかない。学生震災救援隊における野宿や貧困の問題全般の取り組みに関わってきたし、長居の行政代執行にも参加した。また、その他諸々のイベントで夜回り準備会の方々と関わる機会が多く野宿の問題と関わる機会が多かったのは事実である。しかし、実際に野宿している方と関わる機会はほとんどない。僕は、現場に出ないにも関わらず野宿の問題を語ることにについて常に後ろめたさのようなものを感じている。「お前に何がわかる？」といった声がいつも頭の奥のほうから聞こえてくる。

そんな気持ちがずっと胸のうちにあったので、村川さんから元野宿をしていた方の聞き取りを手伝わないかというお話があった時、ぜひ自分も手伝いたいと思った。又聞き知識ではなく、自分の耳で生の声を聞いてみたいと思った。

そういった経緯で、8月の中頃にテツさんのお話の聞き取りに参加させて頂いた。一度目参加した夜回りの時もまともにお話はできず、いろいろと実際にお話を聞くのは初めてで緊張した。実際に自分で質問をしてお話をするわけではなく、ひたすらメモをとっていただけなのですが、やはり場に居合わせ

る重みのようなものを感じた。僕だったら、自分の生い立ち、しかもあまり人に話したくはないような生い立ちを、見知らぬ人間にあまり聞かletたくはないと思う。そう思うと、やはり責任のようなものを感じた。

しかし、聞き取りが始まると、テツさんは嫌がるそぶりもなく、時々僕に向かって穏やかに話しかけて下さった。緊張も徐々にほぐれてきたのだが、やはりお話は僕の想像を絶していた。頭ではわかったような気になっても、自分の人生とはかけ離れていて本当に理解できるとは決していえなかった。それでも聞き取りに参加させて頂いてとてもよかったと思う。自分の知らない人生が、この世には数多くあるということを実感させられた。

聞き取りに参加させて頂いて思うこと。それは、余計に「わからなくなった」ということだ。僕は、実際にお話を聞けば少しは野宿している方のことがわかるのでは、と思っていた。しかし、お話を聞いてみると、きっと人生や背景は人それぞれで、画一的に語るなどできないということを感じさせられた。一人のお話でイメージを作ってしまうほうがよほど危険だ。これからどのように野宿の問題と関わっていくかは正直分からない。ただ、一部の人は知らなくていいという問題でないことだけは確かだ。とりえず僕にできることは、僕の見聞きしたこと、体験したことを人に語ることだ。何ができるかは分からないが、拙いなりに語ることだけは続けていこうと思う。

(えぐち さとし)

「夜回り準備会」におけるこれからの活動のあり方と
現状の懸案事項に対する早期取組みに向けて

岡本 建志

神戸YWCA夜回り準備会のボランティア活動、野宿者訪問・支援に参加し始めたのは、2006年の秋が深まった頃。それからというもの、活動に参加したいという意欲はあるものの、なかなか予定が合わ

ず、継続的な活動ができていないことを自分自身、残念に思っています。しかし、1回参加するごとに新たな気づきがあり、社会福祉士という国家資格を持っていながら、福祉の現場での仕事経験がない僕にとって、この活動はそのことを埋め合わせてくれる大変貴重な機会となっています。

今回、夜回り活動と病院訪問への一参加者として感想を書くにあたり、何の実績もありますが、一介の社会福祉士でもありますので、その視点を持って以下の文章を綴ってみようと思います。

もうみなさんご存知のとおり、社会では「格差」、「二極化」という現象があらゆるところで起きています。大胆な発言をするならば、21世紀前半は「格差社会」という大変重い課題を背負った時代になるのではないのでしょうか。福祉の世界において「格差社会」の現象が特に顕著に現れているのが「障害者自立支援法」です。この法律の施行以降、障害者は福祉サービスへの対価が「応能負担」(世帯の所得額に応じた負担)ではなく「応益負担」(原則、全ての障害者が1割負担)に切り替えられました。このことにより、世帯の所得額が少ない障害者は1割負担を行うことが難しくなり、福祉サービスの利用の取りやめといった事態に陥られている実態があります。つまり、お金のない障害者は現代社会での生きづらさをより一層抱えてしまうことになっているのです。「障害者福祉」という福祉分野が確立されている場面においてこのような状況ですから、一般社会による支援から程遠い位置にいる野宿者が、より一層厳しい立場に立たされることは容易に想像できます。

このような福祉情勢において、夜回り準備会の活動は、「野宿者や野宿経験のある方を訪問して、個別ニーズがあるかどうかを確かめ、必要があれば生活保護等の制度につないだり、他の援助方法によって支援を行う」、いわゆる「リーチアウト」(実際に福祉ニーズを持つ方がいる現場に出向いて必要な支援を行うこと)という手法で、シンプルな取り組み方であるものの、「格差社会」においてより溝が深まった位置にいる人たちへの支援として非常に意義

があり、有効であると言えます。そして、これからはより一層「個別支援」（ケースワーク）といった視点が重要になってきます。社会は既に複雑・多様化していますが、その中において、福祉ニーズも個別性が非常に高くなっています。そういった意味でも、夜回り準備会の活動は非常に素晴らしいものであると思います。

夜回り準備会の活動の一環として、もう一つ、非常に大切な視点があると考えられます。それは、「アドボカシー」（福祉ニーズを持つ当事者の声を代弁して社会制度等の変革をねらいとすること）です。一例として挙げると、2007年2月5日、大阪・長居公園のテント村において大阪市による「行政代執行」が行われました。大阪市はテントの排除、テント住民の追い出しを執行し、そのことに対する抗議行動に夜回り準備会のメンバーも参加されていましたが、この抗議行動そのものがアドボカシーであると言えます。ただ、残念なのは、いくら抗議行動を起こしても行政代執行を防ぐことができない点です。将来的な観点において、今後、同じような形で行政代執行が一般社会において行われなくするためのアドボカシーという見方をし、しぶしぶ納得することもできるかもしれませんが、率直に言って、それではその場で追い出されたテント住民の基本的人権を守ることはできません。

僕は、これからのアドボカシーにおいては戦略が必要と考えます。それは、アドボカシーの対象をマスメディア（テレビ、新聞等）にも向けることです。マスメディアは、当然のごとく、行政代執行を一つの事件として報道しますが、それはあくまで事実として伝えているだけの場合がほとんどであり、ひどい場合には、報道の視点を行政側に傾けて事実を割愛または捏造していることもあります。そのマスメディアに対して、どうアドボカシーしていくか？これは、もちろん夜回り準備会だけが考えるのではなく、野宿者支援団体が一体となって考えていくべきことですが、マスメディアに対して単にプレスリリース（取材依頼を行うための文書やFAXの送付）するだけでなく、マスメディアの編集局にア

ポイントを取り、直接会って話をしていくことが大事だと思います。「なぜ、テント村があるのか？」、「なぜ、テント村の住民はそこに居住することになったのか？」、「その背景には社会的問題が隠されていないか？」、「テント村の住民の基本的人権がなおざりにされているのか？」、「行政は憲法を守る立場にあるはずなのに、なぜ不透明な理屈で行政代執行を行うのか？」、「そこには確かな矛盾が存在するのではないか？」、そして「私たち（野宿者支援団体）は何故この問題を重要視し、志を持って取り組んでいるのか？」といった具合に、野宿者の問題と野宿者支援団体の切実な思いを深く深く掘り下げていく話し方ができれば良いのではないのでしょうか。そのことにより、マスメディアが本来持つ使命、「報道により社会の発展と福祉の向上に尽くす」ことを喚起させるのです。そして、マスメディアがそのような視点で野宿者の問題を一般市民に対して真剣に報道することにより、今度は一般市民が「野宿者の問題は根の深いもので、野宿者も私たちと同じ人間であり、基本的人権が尊重されるべきだ」と考えるようになれば、社会変革を起こすことが可能だと思うのです。

今、統計上では、野宿者の人数は減少傾向にあると言われています。しかし、寝場所がなくて移住しながら路上生活を営む野宿者、主として若者がなっているインターネットカフェ難民、ワーキングプア（フルタイムで働いても生活保護水準以下の収入しか得られない就業者）といった新たな貧困層、といった具合に、夜回り準備会を始めとする野宿者支援団体は、非常にアプローチしにくい野宿者・貧困問題を抱えるようになってきています。このことについて、夜回り準備会はどのように対応していくのか？

僕も一ボランティアとしてみなさんと一緒に考えを深めていきたいと思っています。

（おかもと たけし）

繋がり…その尊さ

岸 洋平

私は夜回りに今まで参加してきて、人と人とのつながりは重要なものだと思わせられた。夜回りで出会うかなりの割合の人は「あの人のことについてわかりませんか？」などと質問すると、大抵何か知っている。近況はわからないにしても、「あの人」がどういう人なのかは知っていた。そういったことは、これまで野宿者は孤独に生きていると勝手に思い込んでいた私にとって多少ならず驚きだった。

1ヶ月ほど前、私も夜回りで何回も会ったことのある、公園内の屋根つきのベンチで寝ていた人が、突然やたらとその場所をきれいにしていなくなっていた。そしていつしかその場所のベンチは新しく塗装されて、真中には寝られないようにするための手すりがついていた。その人は特に仕事はせず、近所の方に毎日食べ物を持ってきてくれる人がいてお世話になっていたそうだ。いきなり居宅になったなんてことはまあないだろうし、追い立てがあったはずだろう。こんなことは夜回りをしていて初めて経験したことで、何よりその人は今どうしているのか、今まで助けてくれていた近所の人との関係が切れたことで苦しんでいるのではないかととても気になった。調査の結果だけ見ると野宿者の数は減っているが、それは見えなくなっただけで、問題が解決したということではない。そんなことは今まで何度も聞いてきたが、初めてそれがどういうことを意味するのかを知識ではなく実感として意識した。2007年の一斉夜回りの結果では、去年より約30%も野宿者の数が減っている。それはケースはいろいろだろうが、そのような活きたいくつものつながりを失くしてしまったということを意味するのではないだろうか。1年以上続けているはずなのに、この恐ろしさを今更になって初めて分かった。

そういった尊いつながりを奪ってきた行政の罪は、命の砦となる場所を奪ってきたことと同等に重い

ではないかと思えるようになった。不法占拠だから撤去ではなく、権力によって簡単にそのつながりを奪ってしまうのをよく認識しなければならないのではないかという今まで自分になかった視点も手に入った。今度は視点だけでなく、実際にどのように行動していくかだろう。

(きし ようへい)

私たち、どこに向う？

堺田 愛

夜回り準備会に関わりはじめて、5年目になる。関わり始めた頃、神戸YWCAのホームページの中の夜回り準備会のページにある「意地悪写真」を見て衝撃を受けたことがある。高架下に野宿している人など誰か住みついたりできぬように金網のフェンスをとりつけ、またフェンスの中に入れないよう鍵をかけているさまや、フェンスではなく路上に「オブジェ」を装って色を塗ったコンクリの塊がいくつも点在するさま、公園のベンチの上に寝転がれないように仕切りがつけられているさまなどを写した写真なのだが、衝撃を受けた。しかし、今年、夜回り準備会のメンバーの野々村さんが写しもって来てくれた写真にその衝撃を上回るショックを受けた。三宮駅前の新しくできた高架下に透明のプラスチックかガラス製の板で覆った空間を写したものだ。それは灘チャレンジの展示の中でも紹介したが、神戸三宮の駅前の景観に馴染むように、野宿する人を寄せ付けない工作が巧みになっていることがわかる写真だった。「排除の不可視化」、金網フェンスにしる「オブジェ」にしるベンチの手すりにしる、排除を匂わせるものだったのに対して、街に溶け込んだ新しい高架下空間は排除を感じさせないキレイな無臭のものなのだ。夜回り活動に参加している私たちは、放置自転車を置かせないため、若者がたむろしないためという建前の理由の裏に隠された「野宿者排除」に気がつくことができるが、多くの人がその

ことに自然に気がつくことはないだろう。私が「意地悪写真」に衝撃を受けたように、もっと多くの人が衝撃を受けて、居場所をなくした人の、あるいは居場所がなくなることについてともに考えたいと思う。

ここ1、2年の間に「ニート」とか「ワーキングプア」とか「ネットカフェ難民」とかっていうワードが現れ、大流行している。そういう言葉でくくられた人たちが注目されだし、メディアで特集が組まれるなどして露出するようになった。そんなふうにより多くの人の目に格差社会が露呈するようになり、関心と危機を煽っているように一見感じるが、格差の流れを阻止できているのかについては疑問。住居がないと生活保護や年金の手続きが難しいことは改善される気配はないし、介護保険制度の見直しにより高齢者の生活は確実に苦しくなっているし、そして、駄目押しかのように最低生活基準とされている生活保護の基準を下げる方向に決定した、それらの社会の動きを見ると阻止するどころか、どんどん歯止めの利かない方向に向かっている恐怖を感じる。もちろん、何の手もうたれていないわけではない。非正規雇用が拡大して仕事は増えているし、若者の就労支援としてハローワークでは「ジョブカフェ」というものができているらしい。しかし、非正規雇用という不安定で且つ少ない賃金労働形態が果たして本当に人の人生を支えられているのか、人間の精神や肉体に希望を持たせることができているのかとても疑問がある。そしてジョブカフェには自衛隊募集のポスターが一番目立つところに貼られていたらしい。改憲論者が声高に叫び、そしてテロ特措法の延長が騒がれている今、戦争ができる国になろうとしている状況で、そんなポスターが貼られているというのは「たくさん困った若者をつくって、若者は兵隊になって戦地に行って死ねることかぁ〜〜！」などと怒りを感じてしまう。少し逸脱した言葉に聞こえるかもしれないが、私たちの社会が本当にそんなことにならないように手を打っていかないといけないと思う。

私は夜回り準備会に関わるようになってはじめて

「私たちの社会」なんだという認識を持ったが、その認識を今後さらに深めたいし、何ができるのかをいろいろな人の考えを知らながら力をいただきながら考えていきたいと思う。

(さかいだ あい)

尼崎貧困問題研究会、設立しました！

砂脇 恵

夜回り準備会との出会いは、もう3年ほど前になるだろうか。夜回り準備会主催の講演会に参加したことがきっかけで、夜回りや昼回りの活動に顔を出すようになった。だが、今年からは活動の場を地元の尼崎に移すことになった。まずそのいきさつと近況を報告したい。

2007年4月現在、尼崎市で公式に確認されている野宿者数は254名とされ、神戸市を抜いて兵庫県下で最も野宿者が多い。尼崎の場合、野宿者が利用する制度や社会資源が限られているうえに、民間団体の活動が地域に根付いていない。私が尼崎で活動したいと思ったのは、地元の課題を地元の住民として考え動いていくことが、野宿問題に対する私なりの当事者性を示すことではないかと思ったからだ。しかし、そのような思いだけでは具体的な活動に結びつかなかったと思う。私を活動へと導いてくれたのは、ここ、夜回り準備会で出会った尼崎の仲間たちである。

私が夜回り準備会に活動し始めた頃、偶然に尼崎在住の社会福祉士の島本健二さん、木下慎也さんと夜回り準備会で出会った。お二人とも野宿生活者の生活支援が本務ではないが、生活問題の最底辺に位置付く野宿問題に関心をもっておられた。野宿を余儀なくされている人々を放置している尼崎地域の状況をソーシャルワーカーとして見過ごすことはできない、というお二人の問題意識に私は深く共感した。

それから2年後の2006年7月、お二人とともに「尼崎貧困問題研究会」というグループを立ち上げ

ることとなった。その後、夜回り準備会のメンバーであった林英明さん、尼崎在住在勤のメンバーが加入し、現在15名の会員で運営している。本会は、月2回、約40人の野宿者のもとを訪問し、安否確認や生活相談を行うとともに、年4回の研究会およびそれらの成果をまとめた会誌『尼崎貧困問題研究』を発行している。

本会の実践課題とは、つぎの2点にあると私は考えている。第一に、尼崎という地域の地勢的特質や歴史をふまえて、尼崎の貧困問題の全体像を浮き彫りにするための研究活動。第二に、野宿を余儀なくされている一人一人との関わりを通して、その人の現在の状況、これまでの歩み、これからの人生について、その個性・固有性と向き合い、必要な支援を展開する実践活動。この両面から、尼崎における貧困問題を浮き彫りにし、地域の課題として提起していきたいと考えている。

(すなわき めぐみ)

みること しること できること

武久 真大

はじめ、夜回りで回るおっちゃんたちは、表現はとても悪いけれど意思疎通のできない人たちだと思っていた。私の地元は北九州だけど、そこで中学高校と出遭ってきた野宿のおっちゃんらにはよく絡まれて話をしようにも全然わかってもらえなかったり、子ども連れに絡んだりしている姿しか見たことがなかった。駅の近くでそういうことに出遭ってしまうと迷惑以外のなにものでもなかった。

けれど、この夜回りと夜中回りに灘チャレンジの役者だからと参加してみたら印象が変わった。みんな、ちゃんと話ができる。それも親しげに。ただひとりで歩いてるところをいきなりとつかまって怒鳴られることしかなかった私にとっては大きな変化だった。

自分の都合であまり夜回りには参加できず夜中回

りが多くなっているけれど、それでも夜回りと違って会う人がはじめての人ばかりでも、やっぱり話ができる。断られたりすることはあっても、意思の疎通はできてる。分かってもらえないことも何度か話すと分かってもらえる。一部の人のイメージだけですべてを語るのはなんと愚かなことだろう。夜回り・夜中回りでそう思えるようになった。

この夏に地元に帰った。地元の友だちと夜遅くまで騒いだ。夜遅くでシャッターのほとんどがしまった商店街をリヤカーにダンボールを落ちそうになるまで積んで運んでいる人に出逢った。地元の野宿のおっちゃんらも働いていた。もちろん、少しでも考える頭があればわかることだけど。でも、あのころの自分はそんなことも分からなかった。よく絡んできたおっちゃんが普段いたところへ行ってみたけど、いなかった。どこかへ移ったのだろうか。

もちろん、活動に関わりはじめて数ヶ月。まだまだ知るべきことはたくさんあるし、どこまでいっても終わりはしないのだろう。地元の駅に降り立ったときに、ひとりのおっちゃんに逢った。おっちゃんは大分から出てきて、数日何も食べてないそうだ。何も分からない私は、お弁当を渡すだけ。何か他にできることはあったのかな、と考えても何も浮かばない。私はまだ何も知らない。もっと知ることに貪欲になろう。

(たけひさ まさひろ)

想像力 中村 祥規

夜回り準備会の活動に参加するようになり、もうすぐ1年になる。はじめは、右も左も分からない状態だったが、おかげさまで活動の輪に加えてもらうようになって、現在に至っている。これを書いているのは、まもなく年の瀬を迎えようとしている2007年の11月末なのだけれど、個人的にもいろいろ変化の大きかったこの1年の中でも、夜回り活動との出

会いは、私にとって大きな位置を占めていたと思う。

さて、夜回りに初めて参加した時のことを振り返ってみたい。「野宿している人を訪問する」と聞いて、当時の私が困りごととして想像していたのは、「食事はどうしているのか」「屋外での生活は寒さがこたえるだろう」ということだった。要するに、「野宿生活をしている人＝現金収入がない人」というイメージがまずあったので、お金がなければ食べるもの、着るものに困るだろう、という考えが先に立ったのだと思う。

だが、夜回りに参加するなかでだんだんと判ってきたのは、そのような問題は（決して小さなことではないものの）野宿している人を取り巻く問題のほんの一部でしかないということだった。夜回り準備会のミーティングでしばしば話題に上るのはもっと複合的な問題で、それはたとえば、医療のことであったり、追い立てのことであったり、襲撃のことである。そして、それが判ると同時に気づかされたのは、私自身の想像力の貧しさだった。

夜回りに参加する以前の私は、医療を受けられずに困っている人、追い立てを受けて住むところを移さざるを得なくなった人がいることをまったく知らなかったのだろうか？ 否、そんなはずはないと思う。野宿している人の多くが50～60代の中老年男性であることや、住所がないと国民健康保険などに加入できないことといった机上の知識は持っていたはずだし、であるとすれば、野宿をしている人でなくとも、そうした世代の人びとが何かしらの健康問題を抱えているであろうことも、容易に想像のつく話である。この間まであったブルーシートのテントがある日突然なくなっているという光景も、以前から時おり目にしていたはずだし、歩道橋下の遮蔽物や手すりのついたベンチはどこに行っても視界に入ってくる。

要は、私は「知らなかった」のではなく、目に見えているものが（野宿している人にとって）何を意味しているのかが「判らなかった」、あるいは「考えようとしていなかった」だけなのだ。バラバラになった知識や経験の断片があるだけで、それがちっ

とも結びついていなかったのだろう。

私にとってのこの1年の夜回りでの活動は、こんな自分自身の「想像力の貧しさ」を発見していくことの繰り返しだったと思う。もちろん、気づけていないことはまだまだ無数にあるはずだ。自分が何を「判っていない」のか、もっと注意深くありたいと思う。

（なかむら よしのり）

熱い語り

中山 茂

神戸YWCAの夜回りに関わって10年近くになります。今は、仕事が忙しく年に数回しか参加出来ませんが、参加者が変わっても会の姿勢というか、目線は変わらず、参加するとほっとします。

長田区で被災したので、神戸YWCAとの関わりは被災者支援の運動が先でした。王子公園横の以前の会館での被災者の会合や震災直後にYWCAの被災者支援グループ（正規の団体がありました）の方と神戸市役所前で座り込んだこともありました。神戸YWCAの野宿者支援は震災以来続けていた公園避難者への支援の延長だったように思います。

被災者支援の運動の繋がりのような流れで、偶然（と言うか寺内さんに強引に誘われて）に夜回りに参加したように思います。当時のメンバーは野々村さん、寺内さん、平山君、そしてボーイスカウト経験者の方など4、5人だったように思います。当時、私が終了ミーティングを撮った写真がありますが、上記の3人だけで、非常にこじんまりとした、静かな集団でした。初めて参加した時の記憶は、野宿者が淡々と語る生活、仕事のこともあります。ミーティングの時間の長さ（終わるのはいつも深夜でした）と熱い語りでした。私は労働組合の関係で釜ヶ崎にはよく行っていたので、少しは予備知識もありましたが、定期的に同じ人を訪問する夜回りは初めてで、YWCAの夜回りの経験は今でもさまざまな

活動にも生かされていると思います。系統的にその人をフォローしていくには、やはり深くその人の生活や仕事、考え方を知らなければ、対処ができないということでした。

この活動スタイルは今も生かされ、メンバーは変わっても（本当に様変わりです）神戸YWCA夜回り準備会のスタイルは定着し、この活動スタイルにより野宿者との信頼関係も築かれているのでしょう。いい意味で愚直（こう書く時、つい野々村さんの顔が浮かびます）に、これからも神戸東部での夜回り続けてください。そして、新規に「あみだされた」深夜夜回りも。私も年に数回、そして炊き出しには参加したいと思います。

（なかやま しげる）

原点回帰

鍋谷 美子

今年、初めて報告書の年間振り返りパートを書いた。個人的には、去年はすでに書いていたものをベースにし、一昨年はそんなに憶えていないので、今年はかなりがつつり報告書作りに関わっていた、という感じがする。1年を振り返る、と一言言うけど、大変な作業だった。というか振り返りきれなかった。あんなこともあったなぁ、こういうこともあった、どんどん移り変わっていく景色やひとを、記憶が辿っていく。

そしてこの間の自分のこともいろいろ考える。ホームヘルパーの仕事で、雇用保険に入れるくらいやっと働くようになり、かと思えば自分の意思でなく事業所を変わらなければいけない事態に陥り、雇用保険も無くなった。有休を取るために不当な条件を付けられ、それに抗議した。自分の足もとからやってかなきゃ、と思うが、そのしんどさも実感した。

最近、野宿のことに関わるようになったのはなんでもか考えさせられることが多かった。一番はやはり、自分のしんどさなのだった。自分が自分を否定して

しまうしんどさ。自分の所在なさ。それが、社会から排除されている人たちへの関心に向かった。でも、自分で自分を否定してしまうとは、自分で自分を差別している、差別を内在化していることに他ならない。そんなあたしが、野宿しててもそんな自分を卑下しないで、とか言えるはずない（言いたいので言ってますけど）。自分やって自分を卑下してるやんか。結局は自分の内面を見つめながら、たたかい、ときには逃げながら、ぼちぼちすすんでいくしかないのだろな。それでも、やっぱり一緒に、ダメでもいいやん、わはは、と言いながらやってけるようになりたい。ときにはひとを傷つけたりもしながら、でもそういう自分も引き受けながら。

自分の中のぐちゃぐちゃも含めて、出会う矛盾に目をつぶらずに、つきあっていきたいと思う。それをあたしの原点に、シッカと据え直そうと思う今日この頃。

（なべたに よしこ）

黙っていないで

野々村 耀

シッコという映画を見ました。アメリカの医療は、高い保険料を払えない貧しいものには過酷だし、保険に入っているでも安い保険ではいい治療を受けられないという現状を訴えていました。費用を払えない患者を路上に捨てる（置き去りにする）病院。労災で指を二本切断された大工に、医者は「薬指は1万2千ドル、中指なら6万ドル、どっちにする？」ときき、安いほうを選んだので、中指がない。安い保険に入っていた夫妻が、自己負担を払えなくなって、家を売ってしまい、娘の家の物置に身を寄せるが、「何時までもは、無理」といわれる。たくさんの、保険に入っているでもちゃんと治療を受けられない悲劇を紹介しながら、カナダやフランスやイギリスの医療制度の下で治療を受けたアメリカ人が「信じられない」といっているのが印象的でした。

良い医療制度がないところ(アメリカ)で育った人は、劣悪な制度が当たり前だと思ってしまう。監督のマイケル・ムーアは、違う制度を紹介することで、「当たり前ではない」ということを伝えようとしているように思えました。そして、人間らしい医療を受けられるように、声をあげようという呼びかけを聞きながら、彼の本当のテーマは、医療というより(医療だけでなく)、民主主義なのではないか？と思いました。

世の中が悪くなると、以前を知っている人は、悪くなったなあと思う。しかし、その悪くなった時代に育った人には、それは当たり前と思えてしまう。

あるとき、若い人に、「このごろの働く環境はひどいねえ」といったら、「なぜ？」と聞かれ、「非正規雇用が若い人の半分にもなるなんて、あんまりだ」というと「僕らは、そうじゃない(時代)を知らない。ずっと、こうだった」といわれました。これがあたりまえ、だったら、「おかしい」と言うのは難しい。過労死するような労働条件はおかしい。働いても、ちゃんと食っていけないのはおかしい。働いても、住むところをもてないで、ネットカフェのリクライニングシートで寝るしかないのは納得できない。その金もなくなって、公園で寝んならんのは納得できない。その公園で寝ようとしたら、ベンチに寝られないような金具がついているのはもっとひどい。

自立支援という名目で行われることが、金のない人をさらに追い詰める。貧しい人の負担はどんどん増えるが、大企業の税金は安くしろという。自己責任という名目で、どんどん困っている人が追い詰められている。

もっと違う世の中があるはずだ、という声を上げないと、死んでいくしかない時代になった。毎年3万人を超える自殺者は、この日本には希望がないとあって、出て行った脱日者なんでしょう。

20年以上前、ある教会の子供の集まりで、横浜寿町の日雇い労働者の話をした後、司会者が「何か質

問のある人」というと、4年生くらいの女の子が「どうして、貧しい人と貧しくない人がいるのですか？」聞いた。僕は絶句しました。大人は「それが当たり前だ」と思っている。しかし、いつの間にかそう思い込まされたのです。どうしてなのでしょう？おかしいと思ったら、声をあげましょう。

昨日、グッドウィルユニオンから「データ装備費」返還訴訟カンパのお礼という手紙を受け取りました。当たり前ではないと、声をあげる人が出始めたことをうれしく思います。

(ののむら よう)

おじさんやメンバーから教わること

檜垣 智子

もう1年くらい前になるかもしれない。今夜は雨が降ると天気予報が言っていて、空もどんよりしていた夜回りの日。川沿いのベンチにいつもは見かけないおじさんが座っていた。声をかけると、いつもは移動しながら暮らしているけれど、雨の日は雨をしのぐため東屋のあるこの川沿いに来ることが多いという。初めて会ったということで、おじさんの日ごろの生活や困っていることなどをお聞きした。おじさんがしみじみと言ったのは、「食事はなんとか……。でも、孤独でねえ。おかしくなりそうですわ」。若い頃に失敗して家族と離れざるを得なくなり、今こうして暮らしていることを話された。「孤独でねえ」ということばに、孤独をつらく感じているのだろう様子が現れていて、心を締め付けられた。

移動しながら野宿する過酷さは想像以上だろう。毎日寝床を確保しなければならぬ心労や緊張感は大きいだろうし、定住している人たちは近くに住む野宿仲間と声をかけあい励ましあったり情報交換をしあうようになることもあるのに比べ、移動しながら暮らす人は一般的に周囲の人と関係を作りにくいだろう。誰とも口を聞かない日もきっとたくさんあるだろう。飢えや暑さ・寒さなどももちろん応える

だろうけど、人とつながりが無いということ、ひとりぼっちだということ、自分の存在がないもののようになっているということのつらさもきっとすごく大きい。

だけど、今、そんな移動しながら野宿する人が増えている。この間、夜回りに参加していても、追いついてや立ち退き、襲撃の危険などから、定住していた場所を離れる人が続いていることを実感する。どこに行ったかわからない人も多い。新しい場所で元気に暮らしていますように、孤独を感じたり気持ちがすさんだりしていませんように、と、会えなくなったおじさんたちの顔を思い出しては、心の中で祈る気持ちでいる。

そして、移動型の人たちにも関わっていけるような新しい活動が求められているのだろう。夜回り準備会では、夜中回りをして、これまでの夜回りの時間帯では会えないおじさんたちと新たに会おうとしている。新しい課題に対して対応を考えて行動する夜回り準備会の姿にも、教わることが多い。

これからも、おじさんたちの置かれている現実とその背景にあるもの、また、それに対してわたしは何ができるのか、考えていきたい。

(ひがき ともこ)

「あわよくば」というよりは……

藤室 玲治

2006年を振り返る

夜回り準備会のメーリングリストに流れていたメールを読み返すと、2006年度の夏頃からぼちぼちと、私が月に1度のミーティングのアジェンダ（議事目録）を書くようになっていく。また月に2回の夜回りの参加者確認などを私がメールで流すようになったのも同じくらいの時期からだ。今（2007年11月）ではこの2つの仕事が私の役割としてすっかりと定着してしまった。

2006年8月に書いたアジェンダで、私は次のよう

に提起している。「2007年度に『無理なく現行の活動を維持しつつ、あわよくば更なる発展を目指しえる』体制構築を目指して新人の獲得や、既存メンバーの力量向上について、ぼつぼつと下半期方針めいたものを考えていく必要があると思います」。

それから1年が経って、夜回りに参加してくれる新しいボランティアは増えていくように感じる。救援隊との関係もあって、2006年度・2007年度と4月には神戸大学の新入生が何人も活動に参加するようになった。また神戸YWCAのWebサイトが新しくなり「夜回り準備会」のページにアクセスしやすくなった2007年始めくらいから、一般の社会人の方などが新たに活動に参加してくれることが多くなっている。

同時に、こうした新しく参加してくれた人と野宿のことなどについてじっくりと話をする時間が取れないのが悩みにもなっている。

ミーティングの運営

私たちの団体は、第2・第4土曜日の夜に夜回りをし、第3土曜日の夜にはミーティングをしている。普段の夜回りの後だけでは話をする時間が取れないので、別に日を設けてミーティングをしているのだ。

そういう趣旨であるから、新しく活動に参加した人に、もうちょっと積極的に働きかけてミーティングに来てもらうようにしなければならなかったかと、その準備に関わることの多かった身として反省している。

今、夜回り準備会の中心を担っている層の多くは、2003年度か2004年度から活動を始めたメンバーである。これは色々な意味で偶然ではない。この層の中で、私だけいささか年齢が上なのだが、他は大体に同世代の女性陣で、野宿者問題について一から学ぶというスタンスで活動をはじめ、夜回りやミーティングの場で野々村さんの話を聞き、またお互い話をしながら、みんなゆっくりと成長ができたように思う。

2007年現在、この「2003・2004年度組」に続くような新たな世代を育てるようにミーティングをやら

なくてはいけないと思いつつ、なかなか、日々の雑務に追われて果たせないでいる。

『わいわい通信』の座談会

2006年度、夜回り準備会では神戸YWCA本体との関係でいくつか問題を抱えていたが、その後は各方面の皆様のご理解とご協力のお蔭で、いったん問題は落ち着いている。今では、夜回り準備会の活動への一定の理解を得ることができているかと思う。

神戸YWCA地域活動委員会の機関紙『わいわい通信』9号（2007年1月発行）で、野宿問題の特集を私が企画し、その一環として、普段は夜回り準備会の活動に参加しているわけではない職員の方々と交えた座談会を行ったが、これは貴重な体験となった。「どうして野宿している人を怖いと思うのか」「実際に野宿者に会ってみて、印象がどのように変わったか」ということについて、具体的に話を聞くことができたのは大きな収穫であった。なにより、私だって最初は野宿している人が怖かったのだから、そういうことを話せてホッとした。夜回り準備会の中だけではなかなかそういう機会を持つことができないところがある。

最近、襲撃や追い立てがあるたびに、関係当局に出向いて話をしに行く機会が多い。その度になんとなく『わいわい通信』の座談会のように話せると楽なのだがと思うが、なかなかそうは行かない。

小学生の「無邪気」な表現

『わいわい通信』の座談会で改めて良く分かったのだが、野宿している人を「怖い」と思って排除する側には、それが人権侵害であるという意識は毛頭無い。そして、個々の市民がそういう意識で野宿者の排除を当局に要請し、また当局は色々と工夫を凝らして排除に躍起になる……、という構造について何とも生々しい「実例」がいくつかあったのがこの1年であった。

襲撃もやはり野宿者への市民の偏見から起こっている。2007年3月、HAT神戸灘の浜の復興住宅で、後輩の学生たちが開催した祭りに遊びに来ていた小

学生が「おい、今からこじきに石投げに行こうぜ」と話していたと後輩から聞いた。第2章に書かれている通り、襲撃がたび重なった時期のエピソードなので良く覚えているが、この小学生のセリフは平均的な市民意識の誠に「無邪気」な表現だと感じられ、実にゾッとさせられた。

こうした市民社会の意識を変えるためには、何かコトがあるたびに声を上げていかななくてはならない。それも当事者とともに声を上げていかなければと思う。その際に（1）当事者との関係、（2）地域社会・市民社会との関係、（3）行政当局との関係の3方向における取り組みの実質が問われる。「あわよくば」と言っている場合ではないようだ。

（ふじむろ れいじ）

「知ろう」とする芽

松本 光代

夜回り準備会に参加してもう2年がたとうとしている。当初ライフワークの一端にもなかったこの活動にどうして継続して参加しているのか。ただ訪問している対象の方のことが「気になる」からである。台風や雨、暑さが厳しい時、寒い時、「大丈夫かな？」。私が思いをはせても仕方ないことではあるが。

以前、お配りしている情報紙に「仲間の皆さんへ」という文言があり、違和感を覚えていた。いわゆる「おっちゃんたちは、私たちと違う存在なんだ」という偏見かなと振り返る。今はなんとなく腑に落ちる。お腹が減り、明日の天気が気になり、隣人の安否を気遣い、うれしいことで笑い、悲しいことで泣く。一緒やん。なにがちがうん？何が私の中の線引きであったのかな？それを今、活動に参加しながら自身に問うている。特に新規のボランティアさんが参加し感想を話される時、私の中でその問いが触発される。まだ答えは出ていないが。

そして以前より「どんな風に話しかけたら良い？相談がでた時にはどうしたら良い？」と聞くことの

出来るボランティア仲間がいる。意見の衝突はあるけれど、それを恐れずできるのが「夜回り」の良さなのかもしれない。

ここは私にとって、自分の中の偏見と向き合い、仲間や自分自身と向き合う場所だと思う。そして少しずつ社会に対して「就労」「貧困」「生きにくさ」などの視点で「知ろう」とする芽も伸びてきたのではないだろうか？だからどうということはないが、街で缶を収集している方に会釈だけでも挨拶をするようになった自分は、「夜回り」に育てられていると思う。

(まつもと みつよ)

テント村と一緒に壊されたもの 村川 奈津美

「帰りいや、もう帰ればいーやん」泣きじゃくりながら、自分が放っていた言葉がこれだったことだけ鮮明に覚えている。帰れ、ではなかった。帰れば良い。てゆうか帰りたい。もう帰ろうよ、みんなで。

06年度は夜回り3年目、共同代表という役職に就いた年であった。と言っても、役割分担が曖昧なまま、実務的なことはほとんど鍋谷さんや藤室さんにお任せしてしまっていた。私はといえば、代表という目立つ肩書きだけは扎扎实身につけ利用しつつ、マイペースに活動していた。今思えば非常に「おいしいところ取り」な気がしてみなさんに本当に申し訳ないのだが、おかげさまですごくラクに、自然体で活動できた気がする。支援隊の活動のほうでもリーダーをしていたのだが、そこでは「リーダーだから」という気負いと使命感が若干なきにしもあらずであった。でもよまわりのほうでは、すごく素直に、悪く言えば自分勝手に活動できていた。そしてその分、なんの気負いも使命感もない、素直なままの心を表出することができていた。

そんな気ままでいたからバチが当たったのか。あの日、壊されてしまった。テント村と一緒に。

きっかけは年の暮れ。06年度も終わりに近くなり、そろそろ自分ももっと広い視野を持ちたいな、大阪のほうにも行ってみたいなと思っていた。そのことを鍋谷さんに話したら、「今度大晦日に長居で年越しで祭りをするから、おいでよ」と言ってもらえた。

大晦日の夜、初めて長居公園のテント村に行った。なんだがすごく不思議な感じがした。初めて来る場所なはずなのに、なんか、落ち着いている。いろいろな人がいる。みんなそのまま、受け入れられている。そんな気がした。

なぜか日付が変わる1時間前には眠くなる幼稚な生態リズムを持っている私は、来てそうそう経たないうちに眠いと言い出し(子どもか)、そうしたら鍋谷さんがテントに連れて行ってくれ、既に寝ていた中桐さんの横で毛布にくるまって寝た。こうして大変フリーダムに新年を迎えた。何かをしたわけではなかった。世間の人々みたいに大騒ぎでカウントダウンをしたわけでもない(他のみなさんはしてはったのかもしれませんが)。ただ、やってきて、のんびりして、眠くなったから寝て、朝起きて、テントの外であったかいコーヒー入れてもらって。寝ぼけ眼でテント村から長居公園を眺めながら、曇った空にコーヒーの香りの白い息を吐いた。

もう、二度と戻れない、あの日。

年が明けて。前々からあった代執行の話が具体的になってきた。「ダイシッコウ」なんて単語の意味も知らなかった。テント村が壊されるのだ。

代執行前にまた大輪祭りが行われるという。1月21日のことだった。何人かで連れ立って行った。新年を迎えた日と変わらない公園だった。壊されるなんて実感はなかった。

でも、2週間後の2月5日、本当に壊された。「まさか壊されないだろう」なんて思っていたわけではなかったけど、壊された。壊された。壊された……。

「今でも信じられない」とかではない。ただ、あのときのことを、論理的に説明できない自分がある。帰りたかった。とにかく帰りたかった。「帰る」場所へ。なんでぶつかりあって、傷つけ合っているんだろう。なんで誰かの住む場所をこんなになってま

で壊そうとするんだろう。帰れば良い、みんな。ここはこのまま残して、長居の仲間の場所として残して、そして自分の場所へ帰れば良い。今すぐに。いろいろあって「帰る場所がない」私は、帰る場所・住む場所・居場所が理不尽に奪われていくことに、どうしようもない感情を抱いてしまうのだろう。憤りではない。不安と、恐怖。誰かの居場所がなくなる時、「お願いだからもうやめて」と、ぎんぎんわめく。恐くて恐くてしょうがないから。

それは神戸で接する人たちにも言える。野宿のおっちゃんも、復興住宅のお年寄りも、しょうがいを持った子も、みんな、「ここが良い」って思える場所にいてほしい。

大阪城公園・うつぼ公園、そして長居公園に続き、また代執行は行われるのだという。私の心が全部壊れるのが先か、人の「場所」を理不尽に壊す奴らが諦めるのが先か。おもしろい、やってやろうじゃないの。

救いの手を差し伸べるとか、守るとか、そんなんではない。ただ、生きていきたい。生きていきたいと心から思える場所で。そして、できれば、一緒に。
(むらかわ なつみ)

逃げ場のない社会への恐怖 山本 かえ子

夜回り準備会に参加してから4年経つ。自身の身辺状況の変化により、昨年度から現在にかけて、夜回り準備会の活動からは一線引いた状態になってしまっているが、それでもときどき活動に参加している。

私が最初に参加したときには50名近くの方に出会っていた夜回りも、現在は20名前後にまで減ってしまった。一時は6～7人のおっちゃんたちがいた川沿いの場所も2人に減り、その後工事が行われたため、誰もいなくなった。その場から去ったMさんは、その近くの橋下で暮らしていたがそこも工事になり、

しばらく会えなかったが、つい最近別の場所で再会した。

出会える人数はたしかに、4年前より減った。しかし、第2章で鍋谷さんが書いているように、野宿している人が減っているわけではないことは明らかだ。逆に、Mさんのように、これまでかろうじてテントを張ったりして、不安定な環境ながらも生活拠点を置いていた人々が、それさえもできない状況に追い込まれているのではないだろうか。

今年7月の一斉夜回りに参加し、私は東灘区の公園を次々と回った。どの公園も以前より「きれい」になっていた。樹木が減って見渡しやすい環境になっており、どこも明るく照らされている。人が座っていたら、確実に目立つつくりになっていた。加えて、ベンチには不必要なほどの手すりがついており、さらにゴミ箱がほとんどなくなっている。これでは、緊急避難で滞在したくても、居られない。だから、なるべくもっと目立たない、生活できる場所に行かざるを得なくなる。生活条件が悪くなる。

たしかに、各地で痛ましい事件が起きている。しかし、安全を確保するからといって、そこに居ざるを得ない人が居られない環境に一方的にしていっていいのか、そういうわけにはいかないだろうとも思う。第3章の聞き取りでは、野宿経験の長い藤原さんでさえも「猫がいなかったらわしもここにおらへん」と言っていた。野宿生活それ自体大変なのに、一定の滞在さえもできない状況に追い込まれるのは、さらに過酷な生活である。

先日、職場に来た出版社の人が「学校のセキュリティが厳しくて、書籍のセールスをしようにも外から訪れにくい」ということを話していた。外部から人が入り込んで来るのが異常とされる社会空間ができている。今の子どもたちがそういった環境の中で生活していることに、怖さを覚えた。このような状況では、さらに「異質なもの」への排除意識が強まってしまうのではないか。

閉じられた空間で常にさらされる、逃げ場のない社会に、私たちは追い込まれていくのだろうか。未来がこれ以上生きづらいものになっていかないよう、

誰もがより自由に生きていける社会にしていきたい。
(やまもと かえこ)

夜回りの感想

頼政 良太

僕が夜回りにいき始めたのは、村川さんに誘われて何となく参加したのがきっかけです。野宿の人のこととか全く知らなくて不安はあったけど、すんなりと回ることが出来て自分のイメージは間違ってたんだと思いました。

初めて回ったときは、全然話もできなくてただ聞いているだけでしたが、最近は徐々に話せるようになったように思います。その過程の中で、信頼関係が出来ているのはすごいことだと思いました。普通に友達みたいな感覚で話が弾んでいる様子などは、これまでの活動の賜物だし、自分もそこまでの関係を作れるようにしたいと思いました。

野宿の人への考えもどんどん変わっていきました。夜回りをする前は、なんか怖い人たちというイメージが強くて、近寄りがたいと思っていましたが、夜回りをするようになって、まず普通の人と一緒にいるという感想を持ちました。その後、聞き取りをさせてもらったりするうちに、経験も豊富だし、面白い人が多いと感じるようになってきました。

1番僕の中で大きな影響を受けたのは、聞き取りをさせてもらったことです。

1人の人の人生を聞かせてもらう事自体、僕にとってはすごく新鮮な事でした。自分はまだ19年しか生きていないし、知らないことも多かったです。

また、聞き取りを通じて、野宿になるきっかけも人それぞれだということを改めて感じました。色々なことが原因で、家族と連絡が取れなくなったり、アパートを出なくてはいけなくなったり。

しかし、今の世間では、そんなことを考えずに、「ホームレス」として一括りにしてしまっているような気がします。問題の深い部分を考えずに取り組

んでも、根本的には解決にはならないと思います。今後は、一人一人をしっかりと見てそれぞれにしっかりと対応が出来るようにしたいです。また、野宿という問題を見て、夜回りをするのではなくて、回る先にいるその人自体を見て夜回りをやっていきたいと思います。

(よりまさ りょうた)

付録 襲撃についての神戸市教育委員会への申入書

以下は、2007年2月から3月にかけて私たちが活動している灘区・東灘区で、野宿している人への襲撃がたび重なったことから、3月15日に神戸市教育委員会へその対策を申し入れた文章です（第2章18ページ参照）。2つの申し入れ事項のうち、最初のひとつについては生徒指導の教員による見回りなどが実現しました。もうひとつの申し入れ事項「教職員自身あるいは教育委員会関係者の野宿者への理解を深めるために、可能な手立てを講じられたい」については、まだ具体的な取り組みとしては行われていないと認識しています。

2007年3月15日（木）

神戸市教育委員会

教育長 小川雄三 殿

指導部長 池内幹夫 殿

神戸YWCA夜回り準備会

共同代表 鍋谷 美子

村川奈津美

神戸市中央区二宮町1-12-10

TEL：078-231-6201

FAX：078-231-6692

中学生の野宿者襲撃防止と教職員の野宿問題への理解を深める取組みについての申し入れ

私ども、神戸YWCA夜回り準備会は、1998年の発足以来、神戸市の灘区・東灘区において野宿している人——いわゆる「ホームレス」——を訪問し、本人から医療や福祉について相談された場合、可能なことを手助けすると同時に、野宿している人の人権侵害を防ぐべく活動している団体です。

別紙の通り、私どもが訪問している先でここひと月ほどの間に、中学生程度と見られる少年による野宿者への襲撃が頻発しております。襲撃は言うまでもなく、野宿している人への人権侵害です。また成り行きによってはより過激な暴力行為へと発展する可能性があることを危惧しています。

もちろん、襲撃者の年齢や所属する学校については明らかではないケースもあるため、すべてが神戸市立の中学校の生徒によるものとは断言できませんが、その可能性は少なくないと考えております。

つきましては、神戸市立の小中学校の生徒による野宿者への襲撃を防止する手立てを講じていただくとともに、その前提として小中学校の教職員ならびに教育委員会の関係者に野宿している人の置かれている厳しい現状についてのご理解を深めていただきたく、ここに以下、申し入れる次第です。よろしくお取り計らいの程、お願いいたします。

【申し入れ事項】

1. 生徒指導などを通じて、生徒による野宿者への襲撃を防ぐ手立てを早急に講じられたい。ただその際、具体的に野宿している場所を明らかにするなど、襲撃を助長しかねない指導は慎まれたい。
2. 指導する教職員自身あるいは教育委員会関係者の野宿者への理解を深めるために、可能な手立てを講じられたい。これについては、私ども神戸YWCA夜回り準備会の者が出向いて説明してもよいし、あるいは教職員などに実際に夜回りに参加してもらってもかまわない。可能なことについては最大限に協力したい。

以上

2007年3月15日には、神戸市教育委員会へ襲撃への対策を申し入れると同時に、神戸市政記者クラブにてプレス・リリースを配布しました。その後、電話を通じてや、直接の取材で多くのマスコミから取材を受け、何社かの新聞記事になりました。また3月15日の夕方のNHKの地方ニュースでも取り上げられました。下に翌日に掲載された2社の記事を紹介します。

神戸新聞

2007年(平成19年)3月16日

金曜日

地

野宿者へ投石続発

支援団体が
市教委へ対策実施申し入れ

灘、東灘

灘区や東灘区の野宿者に対する投石が二月下旬から繰り返されており、いずれも少年の犯行とみられる。野宿者を支援する「神戸YWCA夜回り準備会」は十五日、市教委に対し、対策の実施や野宿問題の啓発をするよう申し入れた。

あった。昨年二回、襲撃され、けがをした野宿者もいるという。また、三月十日には東灘区内の空き地で、少年三人が男性が生活している廃車に投石。窓ガラスが割れた。男性が少年の一人を捕まえ、警察官に引き渡したところ、区内の中学生と分かった。同会は、市教委だけでなく、それぞれの現場に近づき、啓発活動をする。 (高田康夫)

●記事 神戸新聞地域版(神戸東部)
2007年3月16日

ホームレスに暴言、投石

灘、東灘で
7件相次ぐ

神戸市灘区と東灘区で昨年五月より今年三月、中学生とみられる少年グループがホームレスに石を投

あったという。市教委は「許されない行為。巡回強化などの対応を行いたい」としている。

げなどの嫌がらせが7件相次いでいたことが十五日、ホームレスの支援団体「神戸YWCA夜回り準備会」の調査でわかった。いずれもけがはなかったが、同会は「過激な

暴力行為へと発展する恐れがある」として同日、神戸市教委に生徒指導の徹底を申し入れた。

同会によると、昨年五月中旬、同市灘区の河川敷で、少年らがテント生活をして

いる50歳代の男性に対し、石を投げるなど、ホームレス5人に対し、投石や「死

●記事 読売新聞地域版
2007年3月16日

ご協力ありがとうございました

神戸YWCA夜回り準備会 会計報告書 (期間：2006年4月1日～2007年3月31日)

【収入】			【支出】			(単位：円)
項目	金額	備考	項目	金額	備考	
カンパ	161,880	44件	プログラム費	11,248	灘チャレンジ費用	
助成金	30,000	兵庫県社会福祉協議会ボランティア活動助成金	交通費	54,720	駐車料・ガソリン代	
参加費	6,000	ボランティア6名より	通信費	10,058	活動記録発送費・振込手数料	
講演録売上	5,000	講演録売上	事務費	69,046	活動記録紙代・印刷代等	
その他	95,490	神戸大学ボランティア講座謝金・神戸市シルバーカレッジ授業実施謝金・灘チャレンジ売上	消耗品費	25,812	年末の下着寄贈・蚊取り線香・薬等	
			管理費	127,486	分室維持管理費、人件費等	
合計	298,370		合計	298,370		

2006年度(2006年4月1日から2007年3月31日まで)の間に、以下の方々より、夜回り準備会のために活動資金や物品などの寄付をいただきました。記して感謝いたします。

万が一、お名前がもれています場合はご一報いただけましたら幸いです。

篠崎八恵子	島本 健二	長岡多摩子	園部りえ子	内藤 進夫
中尾 廣美	中西	北のコタン宮田洋子	西山 秀樹	鶴崎 祥子
福田 信介	松本 保	野々村 耀	牧野 哲	庄谷 怜子
津田 昌夫	後藤 安子	増田 祐一	保坂須美子	松本 よを
守屋 章子	影山 雅子	片山 恵	中田 作成	佐伯かをる
東 昌宏	成瀬 義明	香川 博司	西島 明子	林 祐介
法身如道有馬吉徳	平河 直	岡本 武志	森崎	岩崎 滋
岡田 信子	吉田 英三	木村 歩	小泉 浩	矢野 啓子
木村 綾				(順不同・敬称略)

ボランティア募集

神戸YWCA夜回り準備会では、活動に参加するボランティアを募集しております。会の目的にご賛同いただけるのならば、どなたでもご参加いただけます。

2007年度も以下の日程で活動を実施しております。なお参加される際には、事前にその旨を神戸YWCAの担当(堺田)までご一報ください。

■夜回り：毎月第2・第4土曜日 神戸YWCA分室（中央区坂口通5-2-16）に18：00集合

※初参加の方へは活動のあらましを説明するオリエンテーションを行いますので、17：00に集合してください。

■病院訪問：毎週木曜日に実施 昼から

※参加日時・集合場所については事前にお問い合わせください。

【お問い合わせ】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10 担当：堺田

TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692 E-mail：sakaida@kobe.ywca.or.jp

編 集 塚田愛・中村祥規・鍋谷美子・野々村耀・藤室玲治・村川奈津美・山本かえ子

発 行 神戸YWCA夜回り準備会

【神戸YWCA本館】 〒651-0093 神戸市中央区二宮町1-12-10 TEL：078-231-6201 FAX：078-231-6692 （担当・塚田）

【神戸YWCA分室】 〒651-0063 神戸市中央区坂口通5-2-16 TEL&FAX：078-221-5111

【E-mail】 office@kobe.ywca.or.jp 【URL】 <http://www.kobe.ywca.or.jp/index.html>

【郵便振替】 01100-0-10298 名義：神戸基督教女子青年会

【銀行口座】 三井住友銀行 三宮支店（普）1015232 名義：（財）神戸YWCA

※夜回り準備会へのご寄付は、郵便振替用紙にその旨明記するか、上記連絡先にご一報ください。
